

十全同窓会会報

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓会会報
編集委員会
印刷/ヨシダ印刷(株)

卒業生に贈る言葉

医学部長兼医学部長 山本 健



卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんは「金沢大学医学部医学科」から平成二十年に改組された「金沢大学医学部」最初の卒業生です。伝統ある金沢大学医学部・医学部の卒業生として、誇りを持って医師・医学研究者としての道を行ってください。

皆さんの上級生が自習スペースの確保に苦勞したのに比較して、皆さんが六年生に進級する直前に待望の医学図書館が

新装オープンし、恵まれた学習環境で卒業試験と国家試験の準備に取り組むことができました。また、第一〇八回医師国家試験まで取り壊しを免れた、旧臨床研究棟の自習室に泊まり込んで勉強に励んだ六年生諸君も多く見受けられました。臨床研究棟自習室を維持して下さった富田勝郎病院長ならびに病院事務方に深謝いたします。

皆さんが金沢で過ごされた六年間の修練は、この地で培った友人・同級生との絆とともに、一生の宝物です。北陸を離れて新しい土地で医学の研鑽を始める人、また北陸の地に留まり、地域の医療に貢献しようと志す人、いずれにとつても、大学時代の友人は頼もしい助っ人です。さらに全国には六千名を超える金沢大学医学部十全同窓会の先輩が活躍しておられます。同窓会の先輩に助けられることがきつとあるでしょう。さらに将来、皆さんの後輩が皆さんに助けられ、同窓

生のありがたさを感じることがあると思います。何処の地で活躍されようとも、十全同窓会との連絡を保つて下さい。

皆さんが初期臨床研修とその後の専門医研修を修了される頃には、日本の医療は随分変わっていると思います。急速に進む高齢化によって、完治が期待できない慢性疾患を抱えた患者さんが増加します。残された身体機能を維持して患者さんの生活の質を保つことが、地域で活躍する医療者の仕事になるでしょう。先進医療・急性期医療とともに、高齢化と疾病構造の変化にも対応できる医療者として研鑽を積まれることを期待します。

「努力にまさる才能はない」

皆さんの人生が実り多いことを祈っています。



平成二十六年年度
金沢大学医学部十全同窓会総会
日時 平成二十六年七月五日(土)
午前十時

場所 金沢大学医学部記念館
(金沢大学医学部構内)

式次第

- 一、開会の辞
- 一、議長選出
- 一、議長挨拶
- 一、物故会員に対する黙祷
- 一、会務報告 理事長
- 一、医薬保健学総合研究科報告 医学系系長
- 一、医学部創立百五十周年記念事業 医学部長
- 一、支部長紹介
- 一、議案審議
 - (一) 平成二十五年年度決算
 - (二) 平成二十六年年度予算(案)
 - (三) 役員改選
 - (四) その他
- 一、閉会の辞

《教授就任講演》

- (一) ヒト胚着床・胎盤形成機構の解明
— 生命誕生とがん治療の現場から —
分子移植学(産婦人科学) 藤原 浩 教授
 - (二) 脳神経系の形成メカニズムの解明
とその医学的応用
細胞遺伝子学 河崎 洋志 教授
 - (三) 痔瘻の画像診断
経血管診療学(放射線科) 蒲田 敏文 教授
- 特別講演及び教授就任講演は、脳医科学専攻・がん医科学専攻・循環医科学専攻・環境医科学専攻のUp-to-date CI-1 を兼ねます。
- 石川県医師会生涯教育研修会指定を受けております。多数ご来聴下さい。

就任挨拶

理事(国際・附属病院・同窓会担当)・副学長に就任

山本 博



平成二十六年四月一日付で金沢大学理事・副学長を拝命し、新しい立場で母校の活動に関わるところとなりました。担当は、国際、附属病院、同窓会・基金の三つであります。微力ではございますが、最善を尽くす所存ですので、今後ともどうかよろしくお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

第一の使命である国際に関して申しますと、高等教育を含む国際社会の多様な面でグローバル化が進み、わが国の大学にも従前に増して国際通用性と国際競争力を高めることが求められております。私が入学した昭和四十年代には金沢大学に学ぶ外国人留学生は数名を数えるのみでしたが、いまや五百名を超す外国人留学生が金沢大学で学んでいます。今後外国人学生・研究者のみならず日本人学生・研究者にとっても魅力と求心力のある金沢大学でありつづけるためには、教育、研究、キャンパス、制度、教職員のさらなる国際化を進めて行かねばなりません。今年度喫緊の課題は、文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」事

業です。本学からの提案が採択に至るようベストに役割をはたしたいと思っております。

第二の使命―病院に関して申しますと、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学の位置付けをもって改革に取り組む」と謳った金沢大学憲章は附属病院にもあてはまります。医薬保健研究域等と密接に連携しつつ、平成二十四年度に古川前理事が中心となって設立された北陸臨床研究推進機構の実質化も基盤に、臨床研究の拡充に尽力したいと思えます。大学附属病院の存在と活動は国立大学法人の財政上も必要であり、健全で安定した病院経営を推し進めねばなりません。限られた人的・知的・財的資源を如何に有効に成果につなげるかを追求しつつ、附属病院の発展と諸課題の解決のため尽力したいと存じます。

使命の第三―同窓会・基金に関して申しますと、大学がどんな時間的、空間的な拡がりをもつかはその大学の総合力を示す重要な要素であり、その中で同窓会は大変な位置を占めます。すなわち、在校・卒業・修了生各員は歴史という経系（たより）と同窓という緯系（たより）で結ばれており、私たちの十全同窓会でございますと、前者は百五十年以上に亘り、後者は全国、世界に拡がっています。平成二十四年、金沢大学の学類、前身学部、前身校の同窓会を束ねた金沢大学校友会が発足し、これまでに三つの学友会海外支部も設立され

ました。学友会海外支部の嚆矢となったのがポストン支部で、広瀬竜夫ハーバード大学教授を支部長とする十全同窓会支部がコアとなりましたし、ミャンマー支部では医学系研究科の修了生キン・マー・ミン博士が支部長を務めています。金沢大学基金は、平成二十年に「学生を応援し、教育研究活動を支え、地域社会に貢献する基金」として設立されました。平

医薬保健研究域・学域長に再任

井関 尚一



このたび、医薬保健研究域長・学域長として再任されました。身に余る光栄と感謝しますとともに、責任の重さを痛感しております。

今後の二年間は第二期中期計画の最後にあたります。国立大学の活動に対する国の関与は近年ますます強まり、ミッション再定義という形で各大学各部署の役割が具体的に指定されるまでになりました。昨年度からの三年間は改革加速期間として位置づけられており、これを受けて金沢大学では昨年度秋から改革検討委員会において議論を重ね、このたび改革基本方針二〇一四をまとめました。医

成二十四年からは日本人学生の派遣と外国人留学生の受入も支援しています。同窓会・学友会と各支部の益々の発展、充実によって金沢大学の「経天緯地」が拡充され、科学と医療における本学の名声が世界に轟くことを期待したいと思います。このためにも金沢大学基金への温かいご篤志をお願い申し上げます。

薬保健研究域に関連するものとして、革新予防医科学共同大学院設置事業の推進、大学院医学博士課程の再編、大学院及び学士課程における教育研究・イノベーション創出機能の強化・充実などが重点方針として挙げられています。

近年強く感じるのは、大学の活動のなかで、文科省を始めとする国の競争的経費を伴う巨大事業に採択されるためのエフォートが増大する一方であり、採択の成否に大学全体が一喜一憂して振り回されていることです。国の要求する改革がすべての射を射ているとは思いませんが、部局に関わる事業が首尾よく採択された場合には、部局の構成員が丸と丸となつてその事業を支え、改革のきつかけとして利用していく必要があると思います。

また、これら事業を各系のみならず、域内センターを含めた医薬保健研究域という部局、あるいはこれにがん研、附属病院などを加えたさらに大きな組織による共同事業として行なうことの必要性や

医薬保健学総合研究科長・医学系長に就任

金子 周一



この度、皆様のご推挙をいただき医薬保健学総合研究科長・医学系長を拝命いたしました。

平成十六年の法人化から十年を迎え、本学は確実に変わりつつあります。政府はよりよい社会を形成するために、国立大学法人に対して、これまで以上に積極的に強力な改革を求めています。本学も、さらにグローバルな課題に対応した新学術の創成と人材育成を行うというコンセプトに従って、人事や給与制度等を含めた、いくつもの改革が推進されていく予定です。

私達の使命を鑑みれば、私達自身が率先して時代にあった改革を行わなければ、そもそも医薬保健学の創成と人材育成という作業はできません。加えて、政府は実質化を求めており、国内外の他の大学と比較して本学の成果を評価しています。その結果として国民からの税金が使われている運営費交付金などに反映するという厳然たる事実があります。これを受けて、本学でも学長をトップとするガバナンスの強化が図られ、改革が推し

進められていきます。法人の考えと現場の教員の考えに微妙な違いが生じることも予想されます。日々の教育と研究や地域貢献、さらに附属病院にあつては診療が重なるなかで、医薬保健学の教員は以前にもまして多忙となっています。しかし、その中にあつて法人が各部署、各教員に実質的な成果を求めて、改革が進められていくものと思われれます。

法人化は競争原理を持ち込むこともひとつの目的でありました。どの大学も企業などの法人が努力しているのと同様に、競争にさらされ、努力をしています。日々の改革によって競争力のあるところをより強くして、裾野をひろげ、グローバルに持続的な競争ができる体制を構築しようとしています。古い話で恐縮ですが、幕末を迎えた加賀藩が、加賀藩のためにという人々によって改革に遅れたことは知られるところです。金沢大学の雄たる医薬保健学が時代を超えて、同じ轍を踏まないことが大切です。改革には痛みを伴うことがありますが、私達はむしろ勇気をもって自らが積極的に実質的な改革に取り組む必要があると感じています。

研究科の特長と自主自律を保ちながら、いかにして日々の運営、そして自らの改革を行うかは大切な課題です。私は若輩であり、もとより浅学非才の身であります。先生方のご支援をいただき、この任を務めさせていただきたいと思っております。宜しくお願ひ申し上げます。

有利性が増大したことも感じられます。域長や研究科長という部局長は、これらの組織内、組織間での調整とまとめの役割とともに、国の意向を受けた大学法人と、個々の教員の集団としての部局との間に立つて、両者にとって最適なバランスを取った方針を作り出す役割も果たす必要があります。国がともすれば大学を国家・社会に奉仕する手段としてのみ考えがちなのに対して、個々の教員にとつて昔と変わらず重要なのは学問の自由に基づいた知の継承と創造だからです。い

わゆる改革と呼ばれるものの多くは組織のしくみの変更を意味しますが、しくみがどうあるかと最後にものを言うのは個々の教員のモチベーションに基づく努力であると思います。私は先見性もリーダーシップも乏しい身ではありますが、今後の二年間、研究科長や医薬保健の各系長、学類長、教職員、同窓会の皆様のご協力を受けつつ、誠意をもって務めますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

叙位・叙勲

従四位

瑞宝小綬章

清水 徹

(平成二十六年
二月二十五日)

春の叙勲

瑞宝中綬章

青木 周一 (昭和三十八年卒業)

山本 達 (昭和三十九年卒業)

瑞宝小綬章

稲坂 暢 (昭和三十九年卒業)

旭日双光章

勝野 芳人 (昭和三十一年卒業)

瑞宝双光章

鈴木 幸男 (昭和三十一年卒業)

故清水 徹 (細菌感染症制御学教授) は、平成二十六年二月二十五日逝去されました。享年五十六歳。万が一遺漏がある場合は御寛恕の上お知らせ頂ければ幸いです。

医学類長に就任

多久和 陽



平成二十六年四月一日より医学類長を担当させていただいております。私は平成十一年に本学（生理学第二講座）に着任いたしました。平成二十年四月の三学域（医薬保健、理工、人文社会）発足後、従来の医学部医学科は医薬保健学域・医学類となり、医学類長が学部教育組織である医学類の舵取りを担当しております。いまでもなく、金沢大学医学類の使命は、地域医療を支えるすぐれた臨床医、研究医、基礎医学研究者などの育成です。この紙面をお借りして、医学類の最重要の課題を、十全同窓会会員の皆様にお伝えさせていただきます。

これまでも金沢大学は歴代医学類長の元で教育改革を積み重ねてまいりましたが、今後は一層のスピード感を持つてよりラディカルな医学教育改革を推進することが求められています。これは、世界医学教育連盟（WFME）がリーダーシップをとり、各国に対して医学教育の質の向上と質保証（米国の医学部教育水準が念頭におかれています）をはたさすため、日本においても、高等教育の質の認証評価を推進しようとの国の方針とも一致することから、医学教育の

質を保証する仕組みを立ち上げようとの機運が高まってきたことにより、昨年度、東京女子医科大学がWFMEによる国際基準に照らした医学教育質の審査を初めて受け、国際認証を得ました。これに続き昨年度は、我が国の医学教育改革を先導している東京医科歯科大学など三大学が審査を受けております。審査の対象には、教育に関わる全領域、すなわち「医学部の使命と目標」から始まり、「入試制度」、「カリキュラム」、「学生の評価」、「教育設備などの教育資源」、「学生支援」等、が含まれます。臨床教育、特に臨床実習の改善が強調されているのが特徴です。昨年五月に、医学教育評価基準日本版が公表されていますが、チュートリアル導入等の単発的な教育改革では到底対応できないことが読み取れます。金沢大学として今後取り組むべきことは、評価基準や先行大学の教育改革例を念頭に研究しつつ一〜六年生の医学類教育全体を仔細に点検して改革プランをまず決定し、改革を実施後しかるべき時機に審査を受けることです。

医学教育国際認証の取得は医学部にとって死活的な重要性を持ちます。国際認証の取得には、今後おそらく五〜一〇年を要し、取得後も継続的な点検・改革が求められます。医学類教員にまず国際認証をご理解いただき、医学類を挙げて取り組むべき大仕事になると思っています。同窓会の皆様には従前にもまして心強いご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

金沢大学附属病院長に就任

並木 幹夫



平成二十六年四月一日から金沢大学附属病院長を拝命しました並木です。私は平成七年に、金沢大学医学部教授（金沢大学附属病院泌尿器科長）として赴任して以来、泌尿器科および関連領域の診療、研究、および教育に全力で取り組んで参りました。また、平成十九年からは北陸がんプロフェッショナル養成プログラムの統括コーディネーターとして、北陸地区のがん専門医療スタッフの教育に貢献して参りました。

この度、金沢大学附属病院の責任者を務めることになり、その責任の重さに身の引き締まる思いですが、もとよりその覚悟はしておりますので、この任を誠心誠意遂行するためのあらゆる努力をいとわぬ所存です。

さて、金沢大学附属病院は北陸の地域医療の要として、関連病院はじめ周辺の医療機関と連携して質の高い医療を提供してきました。また、北陸がんプロを通じて、がん医療の専門的知識・技能を有する医療従事者を多数輩出するなど、医療従事者の教育、地域医療の均てん化に貢献してきました。また、先端医療開発センターを中心に、橋渡し研究、臨床研究を推進しています。

今後、「たまひめネット」（本院での医療情報を、患者が受診する医療機関でインターネット回線を用いて参照できるシステム）を通じて地域医療連携体制が更に充実するよう努力いたします。また、北陸がんプロやCPDセンター等を利用して医療技術、知識の教育体制を更に充実させ、地域医療向上に貢献できるよう努力いたします。

平成二十七年三月の北陸新幹線開業を機に、北陸地域の人の流れが大きく変わる可能性があり、それは医療の分野でも同様です。金沢大学附属病院も国内外から多くの患者が受診する魅力的な医療を創出しなければ、大学病院としての存在価値を問われかねません。きらりと輝く病院を目指して、職員一同頑張ります。

北陸は、暮らしや教育などのレベルが高いことから、各種調査で最も住みやすい地域の一つに選ばれていますが、医療面でも最も優れた地域に選ばれるよう、北陸地域の医療機関とも連携して、地域の住民にベストな医療を提供するよう頑張りたいと存じます。

なお、新執行部は山本博病院担当理事、以下の副院長（山岸正和診療・臨床教育担当、中尾眞二研究担当、谷内江昭安全管理対策担当、山田正仁人事・労務担当、杉山和久広報・地域医療連携担当、吉崎智一総務・法令遵守担当、長瀬啓介経営管理担当、崔吉道薬剤担当、小藤幹恵看護担当、長谷川篤志事務担当）となります。

十全同窓会の諸兄におかれましては、どうかご指導・鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

篁 俊成博士

(昭和六十三年卒業)

包括的代謝学分野教授に就任



平成二十六年三月一日付で、本学に新設された医薬保健研究域医学系 包括的代謝学分野の教授を拝命しました。

私は、昭和六十三年に本学を卒業し、服部信教授が主宰されていた旧第一内科に入局しました。内分泌代謝学研究室に所属し、故・小林健一教授のご指導により大学院を卒業しました。以来一貫して糖尿病の病態と治療に関する基礎・臨床研究に従事してまいりました。平成五年より東北大学医化学教室に移り、日本学術振興会特別研究員時代を含めて四年半にわたり、本学出身の岡本宏教授のご指導のもと、インスリン産生膵β細胞の機能と障害に関する分子生物学的研究に従事しました。平成九年に金沢大学に戻り、インスリン抵抗性の分子機構に関する研究を開始しました。当時助教だった金子周一教授のご指導のもと、独自に作製したDNAチップやSAGE法を用いて、2型糖尿病・肥満症患者さんを含めたヒト肝臓発現遺伝

子情報を構築しました。臨床情報と発現遺伝子情報を照らし合わせることで、病態形成に関わる代謝経路と鍵分子を同定し、それらの機能解析を通じて、エネルギー代

謝調節機構の解明を目指しています。このたび着任した包括的代謝学分野では新たに、オミクス技術を駆使して分子疫学研究を推進し、生活習慣病に対する先制医療に資する新規診断・治療法の開発を目指します。その過程で、基礎研究から、臨床医学、さらには公衆衛生学まで俯瞰して橋渡し研究を推進できる医師、研究者を育成し、新しい予防医学の創成に尽くす所存です。また診療では、引き続き附属病院の内分泌・代謝内科を担当し、

優れた臨床医の育成に尽くします。もとより浅学非才の身ではございますが、母校金沢大学を愛する気持ちだけは負けないと自負しております。学外はもとより、なによりまず学内の様々な領域の研究者との共同研究から相乗効果を生み出すことで、金沢大学の発展に少しでも貢献できればと願っております。十全同窓会の諸先生におかれましては、これまで以上に、お声かけと厳しいご指導を賜りますようお願い申し上げます。

横山 茂博士

(昭和六十年卒業)

金沢大学子どものこころの発達研究センター特任教授に就任



平成二十年七月一日付で金沢大学子どものこころの発達研究セ

ンター特任教授を拝命しました。私は昭和六十年に本学を卒業後、がん研究所免疫生物部門の大学院生として高橋守信先生のご指導の下に研究生生活を始めました。昭和六十三年に東田陽博先生が主宰する医学部附属神経情報施設神経物性部門(現在の脳細胞遺伝子学分野)に採用され、神経伝達物質受容体、イオンチャネルを中心に細胞膜の興奮性調節機構の研究に従事してまいりました。この間、大阪大学細胞工芸センター遺伝子情報研究部門(谷口維紹教授)、京都大学医化学第二教室(沼正作教授)、Yale University 医学部神経学教室(Stephen G.

Maxman教授、Bruce R. Ransom教授)において分子生物学、神経科学を学ぶ機会を与えられました。新しい研究センターでは、自閉症遺伝子研究部門の看板を掲げ、臨床医、文科

系の先生方と協力しながら発達障害の解明に努めております。併せて、大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究所協同運動障害学研究領域の教育と研究も担当しております。十全同窓会の先生方にはご指導ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

後藤 典子博士

(平成元年卒業)

がん進展制御研究所・がん分子標的探索プログラム・分子病態研究分野教授に就任



平成二十五年四月一日付で、本学が

ん分子標的探索プログラム・分子病態研究分野教授を拝命いたしました。私は平成元年に本学を卒業しましたが、三年生

の夏休みより、本学がん研究所の山本健一教授に分子生物学の手ほどきを受け、基礎研究の面白さを教えていただきました。卒業後は東京大病院第三内科にて高久史磨教授のもと大学院生として臨床研修、がんのHER2シグナル伝達の研究をさせていただきました。博士号取得後、東京大学医科学研究所にて、渋谷正史教授のもとシグナル伝達の研究を行い、

ニューヨーク大学医学部に留学する機会を得ました。Joseph Schlessinger教授のもと、ノックアウトマウスを用いたシグナル研究を行い、帰国後東京大学医学部研究所にて、がん幹細胞の研究を始めました。この度、縁あって、恩師である山本健一教授の後任を拝命し、卒業後二

十四年ぶりに故郷に戻ってまいりました。輝かしく発展する本学を目の当たりにし、懐かしさとともに、本学の発展に少しでも貢献できるように、研究と教育に全身全霊をもって邁進する所存でございます。十全同窓会諸先生方のご指導・鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

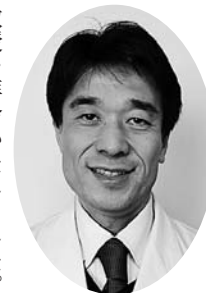
岡田 尚巳博士 (平成三年卒業)

日本医科大学 生化学・分子生物学 (分子遺伝学) 大学院教授に就任



このたび、平成二十六年四月一日付で、日本医科大学 生化学・分子生物学

子生物学(分子遺伝学) 大学院教授を拝命いたしました。私は平成三年に金沢大学医学部を卒業後、山下純宏元教授が主宰された脳神経外科に入局し、平成七年に大学院を修了しました。富山市民病院に勤務後、小児科谷口元教授および谷内江教授のご高配により、平成八年から二年間米国NIHのR.M.Blaese博士の研究室内にて遺伝子治療研究に携わる機会を頂きました。帰国後、公立能登総合病院に勤務しておりましたが、機会があり、平成十二年から自治医科大学遺伝子治療研究部(旧分子生物学)小澤敬也教授の教室で遺伝子治療基盤技術の開発に携わり、助手、講師として研鑽させていただきました。平成十九年、国立精神・神経医療研究センター神経研究所に室長として赴任し、神経筋疾患に対する遺伝



平成二十六年三月一日付で愛知医科大学内科学講座(血液内科)

高見 昭良博士 (平成三年卒業)

愛知医科大学内科学講座 (血液内科) 教授に就任

教授を拝命いたしました。私は平成三年本学卒業後第三内科に入局し、諸先生の薫陶を受け血液内科医として研鑽を積み、造血細胞移植と造血不全を中心に研究を行いました。国内外の専門家と切磋琢磨し交流する一方、検査血液学や輸血医療・行政にも興味を持ち、職種横断的に広く人脈を築けたことは望外の喜びです。

歴史と伝統ある本学卒業生の誇りと、広く声誉を集める旧第三内科同門の責任を胸に、さらなる高みを目指します。金沢大学十全同窓会の先生方には今後ともご指導とご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

愛知医科大学病院は、中核病院として地域医療に貢献しながら、高度医療を提

了後、福井県済生会病院と金沢大学附属病院で診断病理医として勤務する機会をいただきました。平成二十一年からは英国に渡り医師免許を取得し、キングスカレッジ病院で、肝胆膵と臓器移植を専門にしたコンサルタント病理医となりました。これは病理医のなかで最上位のポストで、臨床判断を自分で下せる権限が与えられます。日本の病理医のなかではユ

全 陽博士 (平成十一年卒業)

神戸大学医学研究科病理 ネットワーク学部門 特命教授に就任



平成二十六年四月一日付で、神戸大学医学研究科の特命教授に

採用いただきました。私は平成十一年に本学医学部を卒業して以来、一貫して病理診断学に携わってきました。大学院修

了後、福井県済生会病院と金沢大学附属病院で診断病理医として勤務する機会をいただきました。平成二十一年からは英国に渡り医師免許を取得し、キングスカレッジ病院で、肝胆膵と臓器移植を専門にしたコンサルタント病理医となりました。これは病理医のなかで最上位のポストで、臨床判断を自分で下せる権限が与えられます。日本の病理医のなかではユ

二一クな経歴ですが、数年おきに新たな環境に身を置けたことが、病理診断学に対する探究心を維持し、また研究を進展できた原動力だと感じています。

私は常に自分の能力には不釣り合いのポストで勤務させていただきました。これまで臨床科の先生方のサポートなしではやってこれなかったと感じています

伊藤 真人博士

自治医科大学とちぎ子ども医療センター 小児耳鼻咽喉科教授に就任



平成二十五年十二月一日
自治医科大学とちぎ子ども医療センター

も医療センター小児耳鼻咽喉科教授として転任いたしました。金沢大学耳鼻咽喉科には昭和六十二年入局以来二十六年間にわたり在籍し、特に耳科学（中耳・側頭骨外側頭蓋底外科、難聴、中耳感染症）分野を中心とした診療・研究に従事して参りましたが、診療科や病院を越えて多くの方々にお世話になりました。この場をお借りして、心から御礼申し上げます。

自治医科大学や栃木県にも金沢大学にご縁のある先生が大勢おられ、十全同窓会の歴史の重みと人脈の厚さを実感しております。

新任地の子ども医療センターは大学病院併設型の小児病院であり、高度な小児医療を実践しています。欧米では耳鼻咽喉科の一つの専門分野として広く認

す。お世話になったすべての先生方の名前を挙げることはできませんが、この場を借りまして御礼申し上げます。また、中沼安二教授にはこれまで病理学の直接のご指導をいただき、感謝申し上げます。これからもご指導のほど、どうかよろしくお願いいたします。

(II 会員)

知されてきた小児耳鼻咽喉科ですが、我が国では初めてとなる小児耳鼻咽喉科学講座を担当することとなり、日々研鑽に努めていく所存です。今後は金沢大学で学ばせて頂きましたことを十分に生かして、従来専門としてきた耳科学・側頭骨外科とともに小児耳鼻咽喉科学を車の両輪として、人材育成、診療、研究に取り組んでいく所存ですので、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻の程をよろしくお願ひ申し上げます。

お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について寄稿をお待ちしております。

〒九二〇-八六四〇 金沢市宝町十三一
金沢大学医学部十全同窓会 会報係

TEL 〇七六-二六五-二二二二

FAX 〇七六-三三四-四二〇八

E-mail juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

中沼安二教授・加藤聖教授・山本健教授・ 宮本謙一教授・小泉順二教授退職記念講演会・記念式

平成二十六年三月一日(土)、本年三月末日をもって定年退職された五教授の退職記念講演会と記念式がそれぞれ十全講堂と附属病院宝ホールで開催された。

記念講演会では、中沼教授は「胆管・胆道の病理」と題し、原発性胆汁性肝硬変の発症メカニズム、"biliary diseases with pancreatic counterpart" という新しい疾患コンセプトの提唱などにつき講演された。

加藤教授は「サカナから学ぶラット視神経の再生」と題し、視神経再生に関与するサカナ遺伝子群の同定とこれらの再生分子移入によるラット・マウス視神経再生の成功を中心に講演された。山本教授は「麻酔ひと筋四十年」と題し、世界的なブロスベクティブスタディへと発展した気管挿管困難例に対する新しいアプローチ法の開発を中心に講演された。宮本教授は「根拠に基づく薬物療法のために」と題し、基礎的研究では骨選択的薬物輸送法開発を例に、また、臨床での問題点を基礎研究により解決して臨床現場へフィードバックする「リバーストランスレーショナル研究」では臨床各科の要請に基づ

く数々の課題解決例について講演された。小泉教授は「総合診療について」私のふりかえり」と題し、コレステロールエステル転送蛋白異常症の発見にはじまるリポ蛋白代謝異常の研究、糖尿病の臨床疫学的研究ならびに行動科学的研究、客観的臨床能力試験などに関する医学教育研究の成果について講演された。

記念講演会にひきつづき、退職記念式が行われた。山本博実行委員長式辞の後、実行委員長から記念品が贈呈され、中村信一学長からの祝辞につき、五人の定年退職教授からあいさつがあった。



授からあいさつがあった。授は「麻酔ひと筋四十年」と題し、世界的なブロスベクティブスタディへと発展した気管挿管困難例に対する新しいアプローチ法の開発を中心に講演された。宮本教授は「根拠に基づく薬物療法のために」と題し、基礎的研究では骨選択的薬物輸送法開発を例に、また、臨床での問題点を基礎研究により解決して臨床現場へフィードバックする「リバーストランスレーショナル研究」では臨床各科の要請に基づ

退職挨拶

形態機能病理学 (旧病理学第二) 分野

中沼 安二



平成二十六年の三月三十一日をもって

定年退職しました。昭和四十九年に金沢大学医学部卒業後、(故)太田五六教授が主宰されます第二病理学教室の大学院に入学させて頂き、肝、胆管、胆道の研究を行って来ました。原発性胆汁性肝硬変(PBC)の剖検が契機となり、PBCの研究を始め、現在に至るまでPBCの研究を続けています。PBCでは大体80μm以下の小葉間胆管が、広汎に消失することを見出し、この研究が米国の一流誌であるGastroenterologyに掲載され、研究生活のgood startとなりました。昭和五十九年十一月から、昭和六十年四月まで、米国南カリフォルニア大学ランチョ・ロス・アミゴス病院病理部のR.J.Deter教授の下へ留学しました。大学院生の時から、厚生省の肝炎班、肝内結石症班、特発性門脈圧亢進症班に参加し、私共の研究の主体となりました。昭和六十二年五月、第二病理学教室の教授に昇任し、二十七年間、教室主任として教室の管理、運営、研究指導を行っ

て参りました。英国のP.J.Schauer教授が設立しました国際肝病研究会に、今も参加しております。米国カリフォルニア大学デービス校のM.E.Cashwin教授との共同研究も行い、両教室の発展に大きな貢献を行いました。私共の共同研究がデービス校で高く評価され、平成十一年にClemens von Pirquet賞を受賞しました。

また、PBCに関する研究成果が評価され、肝臓学会から織田賞、米国消化器病学会からRorich賞を受賞しました。肝癌研究会総会、病理学会学会総会、肝臓学会大会などの会長も務めさせて頂きました。当教室の研究成果である胆管癌の非浸潤性病変であるBilliaripNBが、WHO blue bookに掲載され、胆道癌や原発性肝癌の取扱い規約でも採用になっております。英国出版のPathology of the liverで胆管疾患の章を担当しました。私の長年の夢でありました病理学会総会での宿題報告(日本病理学賞)を平成十六年に行いました。教室員全員の研究成果であったと思います。

医学部での管理、運営に関しましては、医学部図書館分館長など多くの委員、委員長を務めさせて頂きました。平成十八年四月より平成二十二年三月まで二期四年間、医学系研究科長、医学系長を務めました。

平成二十二年四月からは、大学院生、研究生の指導と私の研究の総まとめに費

やしました。医学部学生最終講義は、英語で行い大変好評であり、講義終了後、拍手が鳴り止まなかったことが大変印象的でした。また、研究面では、米国ピッツバーグ大学医学部からTotter客員教授賞を受賞し、ドイツのチュービンゲンで開催されましたドイツ肝臓学会総会で特別講演を行いました。平成二十三年に、大阪某印刷所で多数、発生した若年

脳情報分子学 (旧分子神経情報学) 分野

加藤 聖



昭和四十八年三月に本学を卒業し、直ちに根岸晃六先生の主宰される医学部附属神経情報研究施設情報伝達部門に助手として入局しました。先生はサカナの網膜水平細胞の電気生理学研究の第一人者でした。当時、網膜内神経伝達物質についての知見はほとんどありませんでした。そこで灌流下に網膜神経細胞の光応答電位を細胞内外から安定して記録を行ない、種々の伝達候補物質を投与する実験を企画しました。そのための灌流液や灌流法の開発を試行錯誤したのが昨日の事に思い出されます。六年間電気生理学を学び、昭和五十四年から一年間京

者胆管癌の労務災害の病理委員として参加し、この職業性胆管癌の解明に大きく貢献しました。そして、最期の四年間は、私の教授生活で、最も充実したものとなりました。

最後になりましたが、金沢大学医学部在学中の六年間、また卒業後、今に至るまで、皆様方から頂きましたご厚情とご親切に心から感謝申し上げます。

都府立医科大学に神経化学を学ぶため内地留学しました。その頃確立された免疫組織化学の普及による神経伝達物質の局在に関する知識と相まって、神経伝達物質の放出を指標に網膜内神経細胞同士のリナプス入出力を詳細に調べることができ、飛躍的に網膜内神経回路の理解を深めることができました。その後神経毒の特異な作用機序を細胞生物学的に精査し、xコーアンチポーターを介する酸化的ストレス負荷による機序を発見しました。

平成四年に教室を主宰することとなり、研究のテーマを中枢神経の再生としました。その内容はサカナの視神経再生の仕組みを明らかにし、ヒトの中枢神経再生に応用するという壮大なテーマでした。サカナはヒトやラットと異なり脊髄や視神経を損傷しても



ゼブラフィッシュ

機能回復学 (旧麻醉・蘇生学) 分野

山本 健



平成二十六年三月をもって金沢大学を定年退職致しました。私は昭和四十八年に本学医学部医学科を卒業し、同期の浜谷和雄、岸槌進次郎先生と共に、誕生して間もない麻醉学教室に入局しました。主任教授は外科系教授が兼任され、助教授お二人が日替わりで実務責任者を担当



恵寿総合病院院長室からの七尾湾

されていきました。曜日によって使用する麻醉薬や点滴薬が異なるという変則的な勤務ではありましたが、元々くすりが好きであったこと、くすりによって意識と痛覚をなくし、自発呼吸まで止める全身麻酔に興味を引かれたことが入局の理由であったと思います。当時、揮発性吸入麻酔薬はハロセンが全盛であり、術中・術後の鎮痛についてはほとんど考慮されませんでした。術後鎮痛を目的に短時間作用性の麻酔を麻酔中・麻酔後に全身投与するようになるのは、ずっと後の話です。全身麻酔中のモニター機器は未発達で、1チャンネルの四肢誘導心電図が手術部に数台あるのみ。頸動脈の触診、手動の血圧計、胸壁に貼り付けた聴診器による呼吸音・心音が、得られる生体情報ですべてでした。現在手術麻酔に日常的に使用されているパルスオキシメーター、カプノグラフを初め、直接動脈圧波形から心拍出量を算出する先端技術を見るに付け、隔世の感を禁じ得ません。

医学部入学以来、四十七年の長きにわたり金沢大学のお世話になりました。この間、平成十四年に麻酔・蘇生学講座(麻酔科蘇生科)教授を、また平成二十四年から医学類兼医学部長を拝命し、麻酔科医と医学生教育に取り組みと共に、金沢大学医学部創立百五十周年記念事業実行委員長を務めさせていただきました。記念式典から四ヶ月を経ずに完成を見た「金沢大学医学部創立百五十周年

完全に再生できることが知られていませんが、その再生分子に関しては殆ど不明でした。まず、最初にサカナ視神経再生の正確なタイムスケジュールを算出するため、サカナの遊泳軌跡を取得するコンピュータ画像処理装置を工学部との共同研究で試作し、視運動反応や追尾行動の定量的解析法を確立しました。このようにして決定した再生のタイムコースに基づき、網膜や視蓋組織から再生分子をクローニングし、幾つかの再生関連遺伝子を見つけることができました。その中で「再生準備期」に発現上昇するブルプリンというレチノール結合蛋白の発見が、次のレチノイン酸シグナルの発現増加や、更に強力なレチノイン酸誘導性の軸索伸長因子トランスグルタミナーズの発見へとつながっていきました。また興味深い

記念誌」は後世に残すべき史料の宝庫であり、山本博編集長入魂の金字塔です。記念誌編纂の一翼を担えたことを誇りに思います。

臨床面では一貫して手術麻酔と緩和医療に携わって来ました。全身麻酔中の重篤な医療事故(肺血栓塞栓症、薬剤性アナフィラキシー)を任期中に数例経験しましたが、担当麻酔科医の適切な判断と、心臓血管外科、集中治療部を初めとする診療部門のご協力によって救命できたことを感謝しています。これら医療事故の多くは、金沢大学附属病院でなければ救命できなかったと思われまます。

麻酔・緩和医療以外には、平成十八年五月と平成二十六年二月の二度に亘って、脳死下臓器提供のための法的脳死判定に携わる機会を得ました。深夜早朝を

ことに、これらサカナで見つけた再生分子の多くが、哺乳類ラットではむしろ損傷前の対照群に大量に存在し、神経損傷後は急速に発現が下降することを発見しました。そこで、これら再生分子をラット視神経損傷モデルに導入すると、全て成熟ラット視神経を再生させることができました。以上サカナ視神経の再生分子を使って効率の良い哺乳類の中枢神経再生を誘導する分子発見の足掛かりができたと考えています。ヒトへの応用は道半ばといったところですが、将来この様な基礎的研究が大きく花を咲かせる時がくることを願っています。最後になりましたが、これまでの公私にわたる学内外の諸先生方や同窓会の諸先輩方の温かいご支援に心より感謝申し上げ退職のご挨拶とさせていただきます。

厭わず脳死判定に当たられた判定医各位、また電氣的ノイズに悩まされながら脳波など困難な検査を担当された検査部技師のご努力に敬意を表します。臓器移植を受けられた患者さんはいずれも社会復帰され、各位のご辛苦が報われたと思っております。

四十七年を顧みますと、教室員ならびに医学系・附属病院の皆さまに支えられて定年を迎えることができたことを実感いたします。まことにありがとうございました。今後は社会医療法人財団薫仙会恵寿総合病院長として、能登地区の地域医療の充実に取り組みむ所存です。今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら、皆さまのご多幸とご発展を祈念申し上げます。

医薬情報統御学（薬剤部）分野

宮本 謙一



私は、昭和四十七年に本学薬学部を卒業し、北里大学薬学部の助手として就職した。教授は、北里研究所病院の内科部長も兼ねる林田明先生でした。実は、彼は、医師でありながら「今からの薬剤師はもう少し臨床に密着し、薬物療法に貢献しなければならぬ。」と唱えられた。日本の臨床薬学の創始者「だったのです。しかし、私は『臨床薬学』の何たるかを学ぶ暇もなく、わずか三年で新設された北里大学薬学部へ転職してきた。

その後、二十年余り、同大学で薬理学を中心とした基礎研究・教育を行っていたが、平成八年四月より本学薬学部へ配置替えさせられることになる。すでに林田先生は故人となっていたが、彼の「臨床薬学を実践すべし」との強い意志が働いたように感じた。全病棟に薬剤師を配置して、薬品管理に責任を持たせ、薬剤管理指導にも積極的に取り組んでもらった。

また、丁度私が薬剤部に着任した頃から、医療の安全に対する国民の関心が高くなり、当時の河崎病院長のご指導のもと安心・安全な薬物療法を至上命題として薬剤業務の構築に努めた。また、治験の組織的な受け入れと支援のための臨床試験管理センターも私の着任と同時に発足し、センター長を兼務することとなった。当初は、受託件数も多く、前払い制であったため、治験の収益は好調であったが、時の流れに伴って出来高払いとなり、一時、CRC等の人件費まで心配する事態にまでなった。医師主導治験や臨床研究の推進のためにも治験が好調で治験拠点病院の補助金を得ていた時期に本院の治験支援体制を強固なものにしておくべきだったと後悔している。

私が薬剤部に着任した当時の医学生に対する講義といえば、卒業試験の直前に行う特別講義のみであった。それでも半数以上の学生は真面目に聞き、講義終了後は、質問者が列をなすほどであった。彼らの貪欲なまでの知識吸収欲には驚くと同時に、彼らはきっと良い医師になるだろうな、と予感した。以後、麻酔学の「事故・中毒」の講義の中で薬剤部教員が八から一〇コマを担当するようになり、将来的には講義科目「臨床薬理学」が立ち上がるのが決まっている。また、当初は、薬剤部担当のBSLもなかったように思うが、徐々に増やしていただき、現在は、マイナー診療科と同枠数となっ

ている。薬物療法をチームで行わねばならない今日、医学生も薬剤師（部）の仕事の内容、仕事ぶりを知っておくことは重要なことである。これらの教育の中で私が医学生に最も伝えたかったことは、「薬は両刃の剣である」ということである。勿論、薬は、病気を治すための便利なツールであるが、返す刀の裏には、副作用が潜んでいるのである。

医療の現場では、不確実、原因不明、

血液情報病態学（総合診療部）分野

小泉 順二



機序不明な事象は多々あり、薬剤師が病棟で遭遇する問題点や医師から提起される疑問などを基礎的に解決して臨床に戻す所謂「リバーストランスレーショナル研究」は、臨床薬学研究の本質であり、これらを学生や薬剤師と一緒に展開できたことは幸せであった。大したことはできなかったが、大過なく小職を終えることができたことに感謝致します。

平成二十六年三月をもって退職いたしました。お世話になりました。昭和四十八年に本学医学部を卒業して旧第二内科に入り、糖尿病、高脂血症の診療、研究に携わりました。なかでも、コレステリルエステル転送蛋白欠損症の病態説明は、私の研究では特筆すべきものになりました。研究にご協力いただいた皆様に感謝いたします。LDL（低比重リポ蛋白）アフェレーシスの研究で英国ロンドンのハマスミス病院、MRCリポプロテインチームのギルバート・トンブソン先生のごところに留学もさせていただきました。家族ともども貴重な経験をいたしました。

さて、本学では平成七年に総合診療部の検討が附属病院で開始されました。その後平成十年四月より不肖私が教授として働くことになりました。最初の助手には神経内科から古井先生に来ていただきました。その後、野村先生が加わり、尾山先生、前田先生と続き、平成十三年に松倉先生が助手として加わっています。総合診療部外来では、診療対象を、(一) 初診患者では受診科疾病臓器、専門の明確でない新患、(二) 再来患者は疾患の診断が以前以前の患者、(三) 風邪などの一般内科の急性疾患と慢性のCommon Disease患者、(四) 二次、三次医療が必要でない多臓器疾患患者、(五) 社会的、心理的に問題のある患者、老人など総合診療的アプローチが必要な患者、(六) 多臓器疾患で総合診療部のコーディネーター的な役割を必要とする患者として、様々な愁訴をもつ患者をみていました。

当初は腹痛や頭痛、胸痛、咳、めまい、発熱などのありふれた訴えの患者が多くみ

医師国家試験結果 医学類長兼医学部長 山本 健

られました。平成二十一年に外来は完全予約制に移行し、いわゆるwait-timeの患者受診はなくなりました。その結果、最近では発熱を主訴に受診する患者が多く、また、他の診療所や病院で精査をしても原因がわからないとのことで受診する患者が増えています。総合診療は、病態生理を中心とした医療に加えて、患者の「病い」にも対応するという全人的な医療を目指しています。「病い」の部分は、検査をしても異常が見つからないということで精神的なものと片付けられることが多かったと思います。この中には明らかに精神疾患によるものも含まれますが、必ずしもそうともいえないケースが多く見られます。病気になるれば不安になり、その不安により愁訴がさらに強くなっている身体化を生じているケースも多くみられます。原因追求に医師も患者もこだわり不安が増強されているケースもみられます。愁訴があつても生活できていることを認識して対応することが望まれると思います。E

B、医療面接技法、臨床疫学に基づく医学的判断、臨床推論なども重要に思い、OSCE、PBLチュートリアルなど、医学部学生への新しい教育技法の導入にも取り組ませていただきました。また、卒後初期研修制度の確立にも尽力したつもりでしたが、研修医が激減し辛い思いも経験しました。

私の力不足のために皆様のご期待に添えなかつたと真摯に反省しております。しかし、私にとつて総合診療は大きな糧になったように思います。これから益々社会は多様性に富み、人々の健康問題も多岐にわたる、このような状況では総合診療の考え方は益々必要になると思われまふ。本同窓会の皆様へ感謝し、退職のご挨拶いたします。

第一〇八回医師国家試験の本年新卒者合格率は九十五％であり、大学別順位は国立大学私立大学八十校中第四十二位、国立大学四十三校中第二十三位でした。新卒者・既卒者を合わせた総合合格率は九十七％であり、総合合格率は全国平均とほぼ等しい成績でした。

今回医師国試を受験した六年生に対しても、帝王保護者の会のご支援の元、夏と冬の二回にわたつて、医師国試の模擬試験を受験させました。試験場での時間配分を体験してもらつたために受験者は全員医学類講義室で受験し、教育委員会の教授・准教授の先生方に試験監督をお願いしました。今回医師国試を受験した卒業生からは、「模擬試験によつて自分の弱点を知ることができて有用だった。時間配分も重要だと実感した。」との感想が多く聞かれました。長時間にわたる試験監督を担当して下さつた教育委員会の先生方に御礼を申し上げます。

今年の新卒者一〇二名のうち五名は、不本意な結果に終わりました。捲土重来を期待します。不首尾に終わった卒業生の統合型卒業試験成績は、医師国家試験の結果と極めて高い相関を示すことが示されました。昨年もご提案申し上げましたが、医師国家試験の統合試験による卒業判定を実現し、学生の負担を軽減することが必要と考えます。

医師国家試験の出題範囲は年々変化しています。学生の講義・実習を担当される教員各位には、最新の医師国家試験問題に眼を通していただき、新しい出題分野の知識を学生が無理なく吸収できるよう、ご指導

をお願いいたします。最新の医師国家試験既出問題は、市販参考書のほか、以下の模擬試験業者URLからも閲覧可能です。
http://pbs.intrip.com/forums/forum/kokushi_108/

第108回医師国家試験結果 ()内は第107回結果

	受験者	合格者	不合格者	合格率	全国平均
平成26年3月 卒業生	101名 (94名)	96名 (92名)	5名	95.0% (97.9%)	93.9% (93.1%)
平成25年3月 以前の卒業生	7名 (11名)	2名 (6名)	5名	28.6% (54.5%)	61.7% (59.4%)
合計	108名 (105名)	98名 (98名)	10名	90.7% (93.3%)	90.6% (89.8%)

Student Doctor 認定授与式

二〇一〇年九月に米国Education Commission for Foreign Medical Graduates (ECFMG) が、国際基準に認定されていない医学校からの卒業生には米国の医師免許試験の受験資格を与えないことを宣言して以来、にわかに国際基準に対応した医学教育と、これに合わせた医学教育カリキュラムの改革が盛んに論議されています。従来、我が国の医学生は欧米の医学生に比べて、医学的知識では見劣りがしないものの、卒業時の基本的臨床能力では劣っているとされてきました。本学では、十分な期間の診療参加型臨床実習の確保をめざし、数年前からカリキュラムの改革がおこなわれました。講義を中心に病気の原因、症状、治療法についての知識を学ぶいわゆる座学を四年生までに終え、その後五、六年生にかけての二

年半、みっちりと病院で臨床実習を行う様になっていきます。

しかし、病院で実際に患者さんの診療に参加するためには、学生の基本的知識と診察技術が担保されなければなりません。現在、全国八十八大学では、四年生を対象とした全国共用試験、すなわち知識を問うComputer Based Testingと、技術を評価するObjective Structured Clinical Examinationによつて統一的な客観評価を行っています。そして、全国医学部長病院長会議は、この全国共用試験合格者に対して臨床実習への参加にふさわしい能力と適正を有つていなければならないことを「Student Doctor 認定証」を発行してまいりました。

四月十日金沢大学医薬保健学域医学類において、新五年生の臨床実習開始にあたり、全国共用試験合格者に対し、本学初となるStudent Doctor 認定授与式を行いました。授与式では、多久和陽医薬保健学域医学類長から激励の挨拶があり、臨床実習に臨む新五年生百二十三名一人ひとりに対してStudent Doctor 認定証が手渡されました。続いて五年生代表の洞庭葉子さんから「責任感を持つて真摯に臨床実習に参加したい」と宣誓がおこなわれ、井関尚一医薬保健学域長、山岸正和附属病院副病院長、小藤幹恵附属病院看護部長からの祝辞がありました。(大井 章史 記)



受賞

第四十一回医療功労賞受賞

小松市民病院院長

川浦 幸光(昭和四十八年卒業)

平成二十五年一月二十八日都道府県医療功労賞受賞に引き続き三月十五日中央表彰を受賞いたしました。

国内外を問わず、厳しい環境下で長年にわたり献身的な活動を続けてきた医療者の功績をたたえるために昭和四十七年に創設されたものです。

平成元年以来、緩和医療に取り組み、石川県内で石川県済生会金沢病院(平成七年一月認可)と小松市民病院(平成十九年五月認可)の二カ所に緩和ケア病棟を設立し、緩和医療の普及に寄与したことが今回の受賞理由です。

なんとと言っても、緩和ケアの志を持ったスタッフに恵まれたことが受賞に繋がった要因の一つです。

中央表彰式前日には夫婦で天皇皇后陛下下に拝謁し、お言葉を頂き、さらに皇居内を散策する栄に浴しました。表彰式に引き続き、祝賀会が催され、他の受賞者と歓談し、楽しいひと時を過ごしました。

緩和ケアを始めた頃は教科書もなく、医療者、患者・家族にがん性疼痛に対する医療用麻薬の必要性と安全性、さらに、モルヒネの誤解を解くことから始めました。今では、がんと診断された早期からの緩和ケアが叫ばれています。

緩和ケアが人々に浸透してきたとはいえ、その恩恵を受けられない人々がまだ沢山います。今後とも、スタッフが一人一人でも多くのがん患者と家族に緩和医療を提供したいと思えます。

第四十二回医療功労賞受賞

医療法人 升谷医院院長

升谷 一宏(昭和四十六年卒業)

国内外の厳しい環境下で長年に渡り献身的に活動してきた医療関係者に贈られる「第四十二回医療功労賞」(読売新聞社主催、厚生労働省、日本テレビ放送網後援、エーザイ協賛)全国表彰を受賞しました。今回は国内部門十六名、国外部門一名の十七名(医師十三名、歯科医師一名、看護師二名、助産師一名)で、私

の場合は石川県鳳珠郡能登町松波(旧珠洲郡内浦町松波)で地域唯一の診療所を開設し一般外来、往診、訪問診療、訪問看護の体制作り等の在宅医療、特別養護老人ホーム等施設入所者の健康管理、学校医活動や産業医活動等地域での医療、福祉、介護等幅広い分野での活動が評価されたものと思っています。平成二十六年三月十四日帝国ホテルで行われた表彰式において厚生労働大臣賞が授与され、その後夫婦で皇居・宮殿に上がり天皇皇后両陛下に拝謁、天皇陛下より感謝と長年の労をねぎらうお言葉を賜りました。

身に余る賞をいただき、又夫婦で両陛下に拝謁と言う栄に与り慶賀に堪えませんが、この事が過疎地で頑張っている医療関係者や後進の励みにもなればと思ひ、又残された医師人生を地域医療のために捧げようと改めて決意した次第でもあります。

平成二十六年三月六日(土)に、金沢大学附属病院宝ホールにおいて、約百十名の参加を得て本シンポジウムが開催されました。平成二十五年度に予算額二十二億五千万円をもって計画された文部科学省の未来医療研究人材養成拠点形成事業に採択された本学事業「第三の道…医療革新を専門とする医師の養成」のプロジェクトの一環として開催されたものです。本文科省事業は、医療課題の解決に貢献し、国内外の医学・医療の発展を強力に推進することを目的に、「メデイカル・イノベーション推進人材の養成」、「リサーチマインドを持った総合診療医の養成」の二テーマで募集され、本学は医薬保健学域 井関尚一域長を責任者として前者のテーマに応募し、申請件数三十八件から十件の採択事業の一つとして選定されました。

本テーマは、世界の最先端医療の研究・開発等をリードし、将来的にその成果を国内外に普及できる実行力を備えた人材を養成することを目的としています。その趣旨に則り、医学類学士課程、卒業後初期臨床研修、大学院医学博士課程を一貫したメデイカルイノベーションコースを設置し、実用化を視野において研究をいち早く開始させるものです。つまり、臨床医、研究医に続く第三の道として医療革新を専門とする医師の養成を目指しています。

学会報告

「第三の道…医療革新を専門とする医師の養成」キックオフシンポジウム

シンポジウムに先立ち、文科省高等教育局医学教育課長 袖山禎之氏ご臨席のもと、松島綱治東京大学教授、唐木幸子オリンパス株式会社研究開発センター理事・研究統括、斉藤和幸PMDA一般薬等審査部長の三氏をアドバサートとするアドバイザリーボード会議がもたれ、事業の方向性が議論されました。

シンポジウムでは、まず井関尚一域長の開会の辞において上記趣旨説明が行われ、中村信一金沢大学長、袖山禎之氏から各々いただいた開会挨拶、来賓挨拶では、両氏とも本事業への期待を強調されました。

講演は、松島綱治教授の「炎症・免疫基礎研究に基づく医療・創薬への貢献」と題する基調講演で開始され、基礎研究結果をどのような思考・手法で創薬に結びつけたかという、本事業目的の具現化例を示していただきました。その後、事業に主に関与する十二のコア講座から、代表して六講座から研究成果を講演いただきました。それらの内容は、創薬、検査法開発に直結しており、事業の実行性を示したものであり、参加した教員・研究者・修士・博士課程学生や臨床研修医、臨床実習中の医学類学生たちは大いに啓発されたことと思います。

シンポジウム終了後に、CPDセンターで行われた意見交換会では、冒頭にプログラムマネージメント室アンド



絹谷 清剛 記

リユー・シユナイダー特任教授から、ユーモアと機知に富んだ挨拶をいただきました。アドバイザリーボードの先生方、講演者に高度な質問を投げかける学生や若い研究者が多くみられ、本学と本事業の将来に光明を得た感じでした。

本事業獲得は、十全同窓会の諸先輩の積み上げられてきた伝統に基づくものであり、その足場から世界に成果発信できるイノベータータイプな若者たちが数多く育つことを祈念します。そのためにも、同窓会の皆様の一層のご支援をお願いいたします。

（プログラムマネージメント室長

千葉大学・金沢大学・長崎大学予防医科学 共同大学院設置に向けたキックオフ・シンポジウム

金沢大学は、平成二十四年度文部科学省国立大学改革強化推進事業「真の疾患予防を目指したスーパー予防医科学に関する三大学（千葉・金沢・長崎）革新予防医科学共同大学院の設置」に採択され、その事業の一環として、キックオフ・シンポジウム「現代の医療・福祉が抱える諸問題の解決を目指した新しい予防医科学の展開」急務である人材育成と

による共同大学院の形（枠組み）について、その背景と課題認識を含めて説明しました。

千葉大学・金沢大学・長崎大学共同大学院設置に向けて、平成二十六年三月十八日（火）にステーションコンファレンス東京にて開催しました。冒頭、中村信一金沢大学長、齋藤康千葉大学長、片峰茂長崎大学長より、ご挨拶があり、本事業全体の概要、この事業採択までの経緯、本事業に対する各大学としての期待・各大学が貢献できること、予防医科学と共同大学院への期待が述べられました。続きまして、文部科学省から豊岡宏規様（文部科学省高等教育局国立大学法人支援課長）にご挨拶を頂き、国立大学改革との関連、もう一つは「予防医科学」との関連という二つの側面から、文部科学省として本事業に期待することが述べられました。この後、三大学を代表して、中村裕之より、「千葉大学・金沢大学・長崎大学予防医科学共同大学院の理念と構想」と題して、本シンポジウムの開催の目的を説明し、特に三大学が目指す「新しい予防医科学」、国立三大学

次に中谷比呂樹世界保健機関（WHO）本部事務局長補に「グローバルヘルズ時代における予防医学の展望と課題」と題した基調講演を賜り、公衆衛生に関わる健康問題についての世界的情勢、特にグローバルヘルズの観点を含めて公衆衛生学分野における課題と解決手法、この日本の国立三大学による「予防医科学（ゼロ次予防）の考え方」に寄せる期待など、大変、熱心に私どもに語りかけ下さいました。続きまして、一般講演として、①地域医療研究と共同研究構想（前田隆浩長崎大学教授）、②予防医科学におけるゲノム・オミックスデータベースの構築（関根章博京都大学教授）、③早期発見を軸としたゼロ次予防研究（金子周一金沢大学教授）、④新たな国際連携の構築に向けて（森千里千葉大学教授）、⑤新しい教育カリキュラム（羽田明千葉大学教授）について講演があり、座長の永山雄二長崎大学教授より、多様で複雑化する医療現場・社会において「グローバルな視点を持ち、「新しい予防医科学」により様々な課題を解決できるような「人材の育成」が急務であり、三大学のリソース（共同で取り組む研究・国際連携・教育カリキュラム）を最大限に活用することによって、解決への道が拓ける

と発言されました。

最後に、山崎光悦金沢大学理事より、閉会のご挨拶を頂き、世界的な医療・福祉に関する課題に対して、日本がどのように貢献できるかを考えたときに、国立三大学が連携して人材育成を行っていくという本事業が文部科学省により採択された意義は大きい。私たちも全身全霊で本事業の進展にあたっていくので、これからの展開に、是非期待していただきたいと締めくくられました。

シンポジウムの開催にあたり、全面的にご協力を賜りました関係各位に感謝申し上げますとともに、十全同窓会の諸先生方には、共同大学院設置にあたり、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。（千葉大学・金沢大学・長崎大学革新予防医科学共同教育研究センター長 中村 裕之 記）

「新しい予防医科学」、国立三大学

「新しい予防医科学」、国立三大学



未来医療研究人材養成拠点形成事業… メディカル・イノベーション推進人材の養成

医薬保健研究域長（事業推進責任者） 井関 尚一

平成二十五年度から五年間の予定で、文部科学省「未来医療研究人材養成拠点形成事業」として、本学の「第三の道…医療革新を専門とする医師の養成」が採択されました。募集の趣旨は、世界の医療水準の向上及び日本の医療産業の活性化に貢献するため、最先端医療の研究・開発等をリードし、将来的にその成果を国内外に普及できる実行力を備えた人材を養成することでした。そこで本事業の申請にあたっては、臨床現場でのニーズに基づいて最先端の研究を行なうとともに、他分野の研究者や企業等との密接な協力のもとに研究成果を実用化し、新しい医薬品、医療機器、診療技術等を世に送り出して医療革新（メディカル・イノベーション）を行なう医師を養成することを目的とし、このような医師をもつて通常の市中病院等の臨床医、大学等の基礎臨床を含めた研究医に続く第三の道と定義しました。

もとより臨床医は医療の水準をより高めて国民の健康と幸福を増進することを願っているものであり、また研究医はみずからの研究成果が最終的には実用化されて医療革新を引き起こすことを願っています。例えばiPS細胞のような最先端の基礎研究は必ず臨床応用に繋がります。この意味では、第三の道は必ずしも特殊なものではありません。しかし社会

の要請に依って基礎研究から臨床応用までの期間を短くするとともに医療の安全性を確保していくためには、通常の臨床医や研究者にない訓練を必要とします。そのために本事業では学士課程、初期臨床研修、大学院を一貫したメディカル・イノベーションコースを用意しました。

まず学士課程においては、すでに動いているメディカル・リサーチトレーニング（MRT）プログラムと提携することになりました。これは正規カリキュラム外の希望者対象ではありますが、医学類のうちから研究室を体験させ、また研究や英語のゼミや研修に参加させることで、リサーチマインドとグローバル力を涵養し、卒業後に本学の大学院に進む者の数を増やすことが目的です。第三の道を目指すためには大学に残ることが前提であるからです。事業ではMRT参加学生に対して外国人教授による英語ゼミの提供や、国内外での研修費用の一部補助を行います。

次に、初期臨床研修から大学院においては、本事業でイノベーション・コア講座と名付けた特定の分野が指導を行います。これらコア講座はイノベーションに繋がる実用化を視野に入れた研究で実績があり、大学院生にそのような指導を行なう意志のある分野に手を挙げてもらいました。平成二十六年度は十二の分野が

コア講座として登録し、すでに計七人が四月からのイノベーションコース大学院生として登録しています。これらの学生はコア講座において研究指導を受け、企業等とも提携して実用化を視野に入れた研究を行い、かつ必修単位としてメディカル・イノベーションプログラムと名付けた授業を受けます。このプログラムは知材、マーケティングなど、研究成果を製品化するための教育（メディカル・イノベーションセミナー）、新規の医薬品や医療機器、診療技術について正しい評価、安全性確保を行なうための教育（レギュラトリーサイエンスセミナー）、実用英語を学んで世界で活躍するための教育（実践英語）という三本柱の必修講義を含み、学内外の多くの講師が担当します。また企業等との共同研究の演習や、国内外での研修もあり、研修旅費等を事業が全面的に補助します。昨今問題となっている治験・臨床研究における不正事件などは、医師の側に知識がないことが大きな原因であり、本コースの修了者には治験・臨床研究をリードする役割も期待されます。コース修了後には医療革新を行なう専門家として、大学や研究機関での指導的研究医となるとともに、将来的には企業で活躍する医師、みずから医療ベンチャー企業を起こす医師も輩出したいと考えています。

この事業を推進する組織として、まず「メディカル・イノベーションコース運営委員会」は、医薬保健研究域長、医学系長（大学院研究科長）、医学類長、プログラムマネージメント室教員、その他の計十名から構成され、重要事項を審議します。また教育を始めとする事業の実

務の実行部隊として「プログラムマネージメント室」を設けました。そのメンバーは、室長として絹谷清剛教授、専任教員として医学類及び大学院学生に対して英語教育を行なうアンドリュー・シュナイダー特任教授、イノベーションの実績やレギュラトリーサイエンスの専門知識を有し、コース学生への研究指導や講義も担当する米田隆、原章規両特任准教授、事務職員二名からなります。さらにこの事業のアドバイザリーボード（外部評価委員）として、本学卒業で東京大学教授の松島綱治氏、オリンパス株式会社研究開発センター理事の唐木幸子氏、医薬品医療機器総合機構（PMDA）一般薬等審査部長（平成二十五年度まで）の斉藤和幸氏、計三人の方々に委嘱し、産官学の各方面から本事業への適切な評価、助言を得ることにしました。

三月六日に宝ホールにて開催されたキックオフシンポジウムでは、松島綱治教授による基調講演に続いて、イノベーション・コア講座のうち六講座による研究紹介講演が行なわれ、学内の教員、大学院生や医学類学生、また学外の企業関係者など、およそ百十名が出席し、本事業への理解が深まるとともに、今後の本コース参加者が増える効果が期待されました。昨今の国立大学改革案においては、イノベーションというキーワードが強調されています。金沢大学発の医療イノベーションを担う人材の養成を目指す本事業の成功のため、また事業年度終了後の本コースの継続発展のため、十全同窓会の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

病院紹介

シエネラリストを育む 能登総合病院

■病院の特徴

当院は、七尾湾を望む緑に囲まれた七尾市の丘陵地に建つ四百三十四床の能登地域の中核病院です。石川県内に二つある救命救急センター（県立中央病院と当院）の一つを持つ三次救急病院でありながらも、地域完結型医療を目指した在宅診療や精神科診療まで幅広い診療を行っています。くわえて教育システムの整備にも力を入れており、金沢地区以外では唯一の内科認定教育病院となっています。

■病院概要

当院は七尾市と中能登町によって設立され、平成十二年三月に現在の高台に新築移転しました。本館は七階建てで、一階が雪対策のために写真の駐車場の地下にあり、救命救急センターと放射線治療・RI検査部門、屋内駐車場となっています。本館の横には百床を有する精神センターがあり、さらにその横には県立看護学校が、病院前にはPT/OT/救命救急士を養成する医療専門学校が、病院の裏にはヘリポートがあります。

■診療の特徴

医師数は五十八名ですが、大学から週四十八名の応援をいただき、コメディカルの数も同規模病院の一・五倍に増やして医師を支援しています。救急車は年間

千八百台、毎日平均五台で、脳卒中や心筋梗塞、交通事故などによる骨折などが年間二百五十人前後、週あたり平均五人ずつが入院してきます。心臓カテーテル検査は年間千例を超える状況であり、心肺蘇生や救急隊を交えた訓練が毎月のように開催されています。能登地方では依然として脳出血やクモ膜下出血が多く、大きな交通事故も多いのが現状で、これまで脳死を含む三人の臓器提供をおこなっています。在宅診療では、胃瘻やIVHの管理などの他に、自宅で人工呼吸をおこなっている小児もみえています。

■研修医教育

前述のような幅広い診療が学べることで基幹型研修医に来ていただいています。平成二十六年四月からの基幹型研修医は三名全員がフルマッチとなりました。三名は着任早々、精力的に活動し、幸運にも四月十二日の日本内科学会総会の研修医サミットの優秀発表賞に選ばれました。ちなみに、当院は内科認定医を取得できる教育病院であると同時に、精神保健指定医の資格も取得できますので、その期間にも含めることができます。また、給与面でも税込みで研修一年次で約八百九十万円、二年次九百八十万円と、北陸ではもともと高い金額です。

■職員待遇と診療の質向上

「能登は、優しや、土までも」と言われるように、赴任される先生方を温かくお迎え致します。医師のほとんどが金沢大学の出身で、パートに来られる先生も金沢大学の教授や准教授などの指導者が多く、しっかりとバックアップ体

制のもとで、無理のない、楽しく余裕のある診療ができます。また、現在の経営状況は良好で、現金預金が平成二十四年には三十七億円を超えたので、平成二十五年には五億円の本邦一号機となる放射線治療機（エレクターインフイニティ）を入れ、二億円の精神デイ・ケアセンターを建設しました。職員の待遇にも余裕があり、一丸となって診療の質向上に向かって取り組んでおります。また能登北部の病院へは金沢大学から片道二から三時間かかるため、大学にかわって七つの診療科の指導医クラスの中堅医師が応援に行っています。

■金大附属病院から一時間、信号は二つ

最後に、当院は金大附属病院からだと、車でちょうど一時間の距離にあります。大学病院横の金沢美大との間の広い道路を降りていき、鈴見橋の信号が最後の信号で、これを左に曲がって山側環状に乗ります。ノンストップで、白尾インターから平成二十五年四月から無料となった能登里山海道にのり、高速道路の終点が能登総合病院の信号です。ここまで信号は二つしかありません。内浦と呼ばれる穏やかな七尾湾でヨットや釣りを楽しんだり、ゴルフをしたり、すぐ近くには「プロが選ぶ日本のホテル・旅館」で三十四年連続一位の和倉温泉の加賀屋もあります。

今後とも医師、コメディカルの皆さんとの人の輪を大切にしながら、若い人を育てる環境作りに全力を注いでいきたいと思えます。公立能登総合病院をよろしくお願いたします。

（事業管理者 吉村 光弘 記）



病院紹介

富山県済生会高岡病院

■沿革と使命

富山県済生会高岡病院は、社会福祉法人恩賜財団済生会の全国に七十九ある病院の一つです。済生会は、明治天皇の「済生勅語」に基づき明治四十四年に設立され、今年創立一〇三周年を迎えます。設立の目的は、生活困窮のため医療を受けることが困難な人を支援することでした。当院は、昭和二十年八月戦災のため焼失し、高岡市に移転していました。済生会富山病院を引き継ぎ、昭和二十三年三月に高岡駅前で開院しました。その後施設等が老朽化したため、平成六年一月に高岡駅南の現在地に新病院を開院し、今年で二十年になりました。これまで当院の発展にご尽力いただきました歴代の院長をはじめ、勤務された十全同窓会の先生方に感謝いたします。

当院の理念は、「救療済生の済生会精神に基づいて、十分な説明と同意のもと、納得の医療を実践することです。基本方針の第一に、「済生会の理念に則り、患者さんと職員がともに満足する安全で質の高いチーム医療を提供すること」を掲げており、患者さんにやさしい、職員が働きやすい病院を目指しています。平成二十五年度から五年間の中期事業計画を策定しており、当院が果たすべき役割として「地域医療への貢献」、「生活困窮者への援助の積極的推進」、「総合的な医療・福祉サービスの提供」の三本柱が

あります。生活困窮者に対して無料低額診療事業を実施するほか、健康相談、インフルエンザ予防接種などを行っています。また、切れない医療・福祉サービスを提供するため、退院支援システムを構築し、他の医療機関や後方支援施設との連携を推進しています。

■急性期病院としての診療態勢

当院は、富山県西部の高岡市と隣接する氷見市、射水市から成る高岡医療圏の中核病院の一つで、診療科十六科、病床数二六六床（稼働二二七床）、医師数二十九名、職員数三七七名（非正規を含む）の規模です。日本医療機能評価機構の認定、臨床研修病院、富山県がん診療地域連携拠点病院の指定を受け、DPC対象、七対一看護体制の急性期病院です。

金沢大学附属病院から医師の派遣を受けている診療科は、整形外科、産婦人科および泌尿器科です。整形外科では四名の医師が、関節領域と脊椎領域の手術を多く手掛けています。特に年間二二〇件の人工膝関節全置換術においてオリジナルの髓外ガイドを用いた手術を開発し、コンピュータを用いた術前計画や3D立体臓器モデルを用いた先進医療を行っています。また、年間二五〇件以上の低侵襲で回復の早い内視鏡下脊椎手術が高い評価を受けています。産婦人科の常勤医は一名ですが、非常勤医師の応援を得ながら、周産期管理や婦人科がんの開腹手術、腹腔鏡手術、子宮鏡手術を実施しています。当院は世界保健機関・ユニセフから「赤ちゃんにやさしい病院」の認定を受けており、年間約三〇〇件の分娩があります。泌尿器科では、前立腺がんに

対する開腹全摘術、前立腺肥大症の治療をはじめ、泌尿器疾患の診断と治療を行っています。

内科は、十一名の医師が循環器、消化器、糖尿病・内分泌、呼吸器および腎臓・血液浄化の各専門分野を担当しながら、一般内科の診療に従事しています。外科では、がん診療において腹腔鏡手術、抗癌剤治療に加えて緩和ケアを積極的にを行い、在宅緩和ケアにも取り組み成果を上げてきました。今年度から富山大学第二外科出身の医師三名が、消化器外科を中心に診療を行っています。その他、小児科では三名の医師、脳神経外科、眼科、皮膚科、耳鼻咽喉科、放射線科、病理診断科ではそれぞれ一名の常勤医が専門領域の診療に従事しています。

■今後の取り組み

当院では、昨年十月富山県内初の大口径型静音化機能付三テスラMRI装置を導入しました。この装置は患者さんへの負荷が少なく、広い領域で高精細な画像が得られますので利用促進を図っています。今年五月から「高岡医療けんけいネット」に加入いたしました。高岡医療圏の診療所や病院と診療情報を共有することで、医療連携を一層推進したいと考えています。六月に日本医療機能評価機構による三度目の病院機能評価を受審します。当院の医療の質やアメニティの向上のために、職員全体で取り組む良い機会にしたいと思っています。今後病床のあり方について、急性期だけでなく回復期機能を有する病床の設置を検討しなければなりません。

来年三月の北陸新幹線開通に向け、当

院のすぐ傍に新高岡駅が完成間近です。北陸最大のイオンモールが隣にありますので、これから周辺の人口が増え、賑わうことを期待しています。そして、臨床研修医が一人でも多く当院に来てくれることを希望しています。

金沢大学附属病院から当院に派遣されている医師は少なくなりましたが、近隣には十全同窓会員の先生方が大勢おられます。今後ともご指導、ご支援をよろしくお願いいたします。

（院長 飯田 博行 記）



教室だより

環境生態医学・公衆衛生学

【沿革】公衆衛生学教室は、戦後定められた医学教育基準に基づき、連合軍総司令部によりアメリカ流の予防医学の教育・研究の発展を目的として昭和二十五年に新たに設けられました。初代教授に衛生学の助教であった石崎有信先生が任命されました。昭和三十七年に重松逸造先生が第二代の教授として着任されました。昭和四十七年に第三代教授の岡田晃先生が、平成七年に第四代教授の荻野景規先生が就任されました。平成十三年に大学院部局化に伴い、教室名が環境生態医学に変更となりました。平成十九年に中村裕之先生の教授着任に伴い、教室名が環境生態医学・公衆衛生学となり、現在に至っています。平成二十六年四月現在の教室員は、神林講師、日比野助教、辻口特任助教、堀井研究員、藤田事務補佐員、葛城技能補佐員、博士課程大学院生十名(ケニアとベトナムからの留学生二名を含む)です。

産業医学や環境医学だけでなく、学際的な領域の専門の講師を学内外から一名お迎えし、ご講演頂いております。また、中村教授の「統計セミナー」も行なっています。

医学類、保健学類の教員の協力を得て「予防医学概論」を開講しています。本講義は「予防医学指導士」認定のためのカリキュラムとなっています。予防医学指導士は、予防医学に基づく健康管理を専門とする優れた医療従事者を育成し、予防医療の向上を図るため日本予防医学会に設けられた制度です。予防医学指導士の養成の目的は、特定健康診査と特定保健指導の義務化に対応して、生活習慣病予防の有能な指導者を養成することにあります。住民の健康を守るための健診事業の企画、実施、評価に必要な知識と方法論を概説しています。

【共同大学院の設置】平成二十四年度国立大学改革強化推進事業「真の疾病予防を目指したスーパー予防医学」に関する三大学(千葉・金沢・長崎)革新予防医学共同大学院(仮称)の設置の採択を基幹校として受け、平成二十八年四月の設置を目指して準備を行なっています。現在、「生活習慣病」「稀少疾患」「悪性腫瘍」「薬剤に対する副作用」などに関する予防について解決が望まれています。従来、予防医学では十分に対応出来ない所がありました。そこで、本共同大学院ではこ



のような課題を解決するために、従来の一次予防(生活習慣)、二次予防(疾病の早期発見・早期治療)、三次予防(疾病の再発防止、薬剤副作用予防)に「ゼロ次予防(ゲノムおよびエピゲノム情報)」の概念を加え、オミクス解析とマクロ環境による研究を情報工学により統合し、標準化して、ゼロ次予防から三次予防を包括的かつ縦断的に取り扱う「新しい予防医学」への展開を行っていきます。また、これを推進・実践できる人材(予防医学専門医師、予防医学研究者・教育者、厚生行政官など)の育成を行います。現在、設置審議会審査に向けての資料作成、教育カリキュラムの作成や共同研究の立ち上げを行なっています。本年三月十八日には、東京でキックオフシンポジウム「現代の医療・福祉が抱える諸問題の解決を目指した新しい予防医学の展開」急務である人材育成と千葉大学・金沢大学・長崎大学共同大学院設置に向けて「」を開催しました。本シンポジウムで、各大学の学長と文部科学省関係者にご挨拶を頂き、WHO本部事務局長補の中谷比呂樹先生にご講演頂きました。また、我々の目指す共同大学院について紹介致しました。

【疫学研究と地域連携事業】平成二十三年三月十二日に石川県羽咋郡志賀町と志賀町健康づくり連携協定を結び、住民の健康増進のために生涯一貫型と全住民参加型の予防と健康づくりの新しい仕組みづくりを立ち上げ、同時に疫学研究を行っています。この取り組みは少なくとも二十年続けて行く予定です。平成二十三年度にはモデル地区として二地区を選び、六十五歳以上の住民を対象に、平成二十四年度には四十歳から六十五歳までの住民を対象に健康や食事に関する調査を行いました。平成二十五年度には、志賀町全体の幼稚園児や保育園児から中学生までを対象に健康や食事に関するアンケート調査を行いました。また、臨床の教室と連携し、モデル地区の四十歳以上の住民を対象に生体試料や生理的機能検査を中心とした「スーパー予防医学」住民検診」を行いました。三年間でモデル地区の全住民の検診を行なう予定です。

【黄砂とアレルギー疾患】黄砂やPM_{2.5}をはじめとした大気汚染物質の飛来が増加しています。黄砂や大気汚染物質がアレルギー疾患(気管支喘息など)を増悪させると言われていますが、まだ明らかになっていません。当教室では、黄砂や大気汚染物質とアレルギー疾患増悪の関連を明らかにし、関連する物質を探求して、その予防法を開発することを目的として、平成二十一年度から呼吸器内科や耳鼻咽喉科と共同研究を行なっています。

【おわりに】末筆になりましたが、教室員一同、研究、教育、地域貢献を行ない、予防医学の発展、金沢大学および金沢大学医薬保健研究域の発展に向けて努力する所存でございますので、十全同窓会の先生方には、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

(神林 康弘 記)

がん局所制御学

【沿革】当教室は、泉伍朗先生が大正十一年十一月に九州大学より金沢医学専門学校の教授に就任され、大正十二年四月に金沢医科大学が発足するとともに現在のような講座制がとられました。昭和三年六月には北海道大学から熊埜御堂進先生が第二代教授に就任し、昭和二十四年五月より金沢大学医学部外科第二講座となり、昭和三十四年五月には京都大学から本庄一夫先生が第三代教授に就任し、昭和三十七年に本邦初の肝門部胆管癌切除をおこないました。さらに、胆癌の門脈を結紮することで、結紮は委縮し癌のない葉は肥大するという理論に基づき切除不能肝癌に対する門脈枝結紮術を開発しました。昭和四十年八月から水上哲次先生が金沢大学結核研究所附属病院長を経て第四代教授に就任し、昭和四十九年四月には当教室から宮崎逸夫先生が第五代教授に昇任しました。宮崎外科時代には診療、研究面において各臓器別の分担任者を決め、各分野で活発な活動が行われました。宮崎教授自身は消化器外科の中でも特に胆道、膵臓を専門分野とし、これらの分野で多くの業績を残しました。平成九年七月には当教室助教授の三輪晃一先生が第六代教授に昇任しました。三輪教授は胃癌におけるセンチネルリンパ節理論に基づく縮小手術を開発するにとどまらず、教室の念願であった生体肝移植を成功させ、さらに胸

腔鏡下食道手術などの新しい手術手技の導入や、上腸間膜動脈門脈合切（幽門温存）・臍頭十二指腸切除術の開発など多くの業績をあげました。平成十三年四月に大学院部局化に伴い教室名が、がん医科学専攻がん局所制御学講座に変更となりました。平成十八年四月には太田哲生先生が当教室助教授より第七代教授に昇任し現在に至っています。診療内容は消化器外科全般、乳腺（主に乳がん）、小児外科ですが、消化器外科といっても上部消化管外科、下部消化管外科、胆膵外科、肝臓外科、移植再生外科と多岐にわたるチームが一体となって患者さんの診療や教育、研究にあたっています。症例検討や大学院生のゼミナールも医局員全員が会して行われるため、広い知識や情報の伝達が行われる体制となっています。

【教育】学生教育では、講義および実習をおこなっています。近年の外科離れを少しでも阻止するために、手術見学において直に患者さんのお腹の中を触ってぬくもりを感じてもらったり、医局でウエットロボと称してブタの皮膚縫合や腸管吻合を体験してもらったりして、外科の魅力が伝えられるよう苦心しています。外科医にとって病理学は重要と



の観点から博士課程の教育の一貫として「臨床病理カンファレンス」や「ミクロクルス」を毎月開催し自分で病理組織を理解できるようトレーニングしています。

【臨床】（上部消化管外科）食道外科では鏡視下手術をいち早く導入し、ほとんどの症例に施行しており、特に進行例において全国平均の約二十パーセントを上回る治療成績を示します。胃外科では早期癌に対する腹腔鏡下センチネル・ナビゲーション手術による機能温存手術を行うと同時に、高度リンパ節転移症例や腹膜播種症例に対する導入化学療法＋conversion手術により全国屈指の成績を示しています。

（下部消化管外科）結腸直腸癌のほとんどの症例を鏡視下手術でおこない、肝転移症例においても化学療法＋分子標的療法を併用し二期的

の療法を併用し二期的に肝切除をおこない良好な成績を挙げています。炎症性腸疾患についても炎症性腸疾患セクターと連携し潰瘍性大腸炎やクローン病に対して積極的に手術を行っています。

（肝臓外科）原発性肝癌や転移性肝癌を積極的に切除しています。当科では生体肝移植を開始してから肝切除技術が大幅に向上し、高難度症例においても綿密な周術期管理のもと安全な肝切除が可能となっています。また、日本海側唯一の脳死肝移植実施施設です。

（胆膵外科）この領域の癌は難治性であり、切除可能であってもその多くは再発します。当科では既に存在している微小転移を術前化学療法で消滅させた後、発生学に基づいたリンパ節郭清および血管合併切除を行い、良好な成績を挙げています。

（乳腺科）年々増加する乳癌に対し、生検による病理組織検査により治療方針を決定し、患者さん個々に最適な治療法を選択しています。

（小児外科）北陸でも数少ない小児外科施設として、新生児から思春期までの一般外科疾患および泌尿器疾患を小児科、泌尿器科と連携して治療にあたっています。

【研究】研究内容としては、「発生学・外科解剖学に基づいた肝胆膵手術の開発」「阻血・再灌流障害の病態解明と治療法の開発」「肝移植時の免疫寛容の病態と治療法の開発」「周術期の免疫能と栄養」「癌微小環境における病態生理」「膜播種に対する分子標的治療」など多岐にわたりますが、いずれも実臨床を通じて得られた問題点を改善するために開始したテーマであり、「Bed to Bench, Bench to Bed」を心がけて大学院生と教室スタッフが一体となって取り組んでいます。

また最近では、これらの多くの病態に血管外血小板凝集 Extravasated Platelet Aggregation (EPA) が関与していることを発見し新しい治療法の開発を目指していますので、今後の展開にご注目いただくと幸いです。今後とも十全同窓会の皆様方のご指導、ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。

（伏田 幸夫 記）

支部だより

福島支部

平成二十五年十一月三十日(土)午後七時より、平成二十五年全同窓会福島支部総会が福島県郡山市 割烹「京香」で開催されました。

出席者は六名でありましたが、昨年より二名多く、今回初めて金沢大学大学院を卒業された歯科医である、渡部好造先生が会津から参加してくださいました。今年度より竹田が福島県支部長の重責を、前会長の鈴木孝雄先生より引き継がせていただきました。

自己紹介、会務報告の後、鈴木孝雄先生に乾杯のご挨拶をいただき、しゃぶしゃぶを食しながら懇談となりました。現在福島支部には二十名の会員がおりますが、福島県は会津盆地を中心とした会津、奥羽山脈と阿武隈山地の間の中通り、太平洋岸の浜通りの三地方で成り



同窓生の消息

立っています。県の中では岩手に次いで二番目に広く、北陸三県合わせたよりも面積は大きいです。原発事故の影響を含め、医療態勢も三地方でかなり違っておられます。今回出席していただいた先生方も、所属されている郡市医師会は別で、診療科も違っておりました。年一回ではあります。県内の他の地域や他科の状況

第五十八回日本未熟児新生児学会学術集会 石川県立中央病院副院長 久保 実(昭和五十二年卒業)

平成二十五年十一月三十日から十二日にかけて第五十八回日本未熟児新生児学会学術集会を石川県立音楽堂、ANKクラウンプラザホテル金沢およびホテル金沢において開催しました。本学術集

会は例年、日本新生児看護学会の学術集会と同時開催(第二十三回の学術集会長は高谷恵子石川県立中央病院看護部長)しており、国内から約千二百名の小児科・新生児科医および千名を超える看護師・助産師が参加しました。

第五十八回日本未熟児新生児学会学術集会のテーマは「怒(思いやりの心)」赤ちゃんとやさしい医療・ケアを考える」です。会長講演として、「赤ちゃんとやさしい医療のために、一地方で行ってきたこと」と題して石川県の未熟児新生児の歴史と、その中で日本をリードし

国内外に発信してきた治療や研究の一端をご紹介します。特別講演では、ダウン症の書道家、金澤翔子様に「怒」の席上揮毫を行なっていただき、母親の泰子

況を感じることもできる貴重な会となりました。写真 後列左から：清野弘明(昭和六十年卒業)、野澤靖美(昭和五十三年卒業)、渡部好造(昭和五十九年大学院)、前列左から：鈴木孝雄(昭和三十二年卒業)、竹田洋介(昭和六十年卒業)、斉藤光正(昭和四十一年卒業)

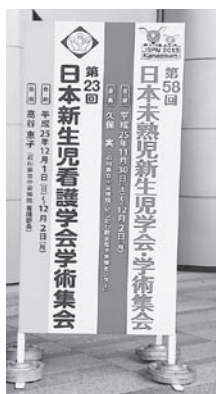
様から「ダウン症の子どもを育てて学んだこと」天使がこの世に降り立てば「」をご講演いただきましたが、ダウン症は決して障がいではなく、すばらしい個性であることが披露され、一同大に感銘を受けました。

学術集会では「やさしい医療・ケア」のテーマに沿って「脳にやさしい循環管理」「肺にやさしい呼吸療法」のシンポジウム等を行いました。新生児医療の進歩によって児の生命予後は著明に改善していますが、一方で発達障害や学習障害の児が増えてきています。今正に発達を阻害しない治療・ケアが求められており、最新の呼吸・循環管理の医療技術と

きめ細やかなケアが新生児の発達予後を改善してきています。シンポジウム「二十一世紀の科学でWilson-Mitky症候群を再考する」では、未熟児の慢性肺疾患について、日本から世界に発信する知見の数々が討論されました。新生児集中治療室(NICU)のような環境ではMRS

A等の院内感染対策は最重要課題で、シンポジウム「アウトブレイクに備える」でも活発な討論が行われました。その他、教育講演九題、韓国からの招待講演および一般演題四百九十七題の発表が行われました。若手医師のためのワークショップ「新生児疾患診断のピットフォール」でも活発な討論が行われました。

本学術集会の特徴の一つは新生児看護学会とのコラボレーションです。合同でのシンポジウムとして三題企画しました。「NICUに入院している新生児の痛みの軽減を目指したケア」ガイドライン作成に向けて「NICUの後方支援」「NICUから始める虐待予防」です。医師と看護師・コメディカルが「やさしい医療・ケア」の実践について熱い議論を行ないました。一方、会員懇親会では金沢流のおもてなしに心がけ、芸妓衆による素囃子で開幕、地酒で乾杯し、金沢の伝統文化と食とお酒を楽しんでいただきました。



右：学術集会の案内



上：会長講演での著者
下：金澤翔子様に席上揮毫していただいた「怒」

JUZEN FORUM HISTORICUM

十全歴史ひろば【2】

もう一人の日本学士院賞受賞者

あさのみちぞう
浅野三千三

編集委員 山本 博

日本学士院賞は学者に与えられる国家的榮譽の一つである。『金沢大学医学部創立百五十周年記念誌』では、本学医学部にゆかりのある延べ十名の日本学士院賞受賞者につき記した⁽¹⁾。本稿では、金沢医科大学附属薬学専門部で第二十六回日本学士院賞を受賞した浅野三千三につき述べる。

一、浅野三千三経歴⁽²⁾

浅野三千三(図1)は、明治二十七年(一八九四年)九月東京で生まれ、東京府立三中、第一高等学校理科乙類を経て、大正八(一九一九)年七月東京帝国大学医学部薬学科を卒業。助手として大学に残り、薬学第一講座(生薬学)朝比奈泰彦教授の下で研究。大正十四(一九二五)年四月金沢医科大学附属薬学専門部教授となる。昭和元(一九二六)年五月、論文「イソランド苔の成分プロトケステリン酸およびその誘導体の構造について」で薬学博士。昭和二(一九二七)年から昭和五(一九三〇)年までドイツミュンヘン大学に留学、Heinrich Wielandの教えを受ける。昭和六(一九三一年)年、金沢医科大学附属薬学専門部主事。昭和十三(一九三八年)年、東京帝国大学伝染病研究所教授。昭和十六(一九四一年)年、朝比奈教授退官のため東京帝国大学医学部薬学科教授を併任。昭和十九(一九四四年)、東京帝国大学医学部薬学第三講座教授。戦中、結核に罹患。昭和二十三(一九四八年)年四月一七日急逝(享年五十三)。

二、帝国学士院賞受賞

昭和十一(一九三六年)六月一日、浅野三千三薬学博士の「地衣脂肪酸並にプルヴィン酸系色素に関する研究」に対して



図1 金沢医科大学附属薬学専門部主事 薬学博士 浅野三千三⁽⁴⁾

の真骨頂であり、帝国学士院賞に結実した。

昭和十一年六月九日、薬学会創設二十五周年記念祝賀会と併せ、浅野三千三教授帝国学士院賞受賞特別講演が行われた。昭和十三年金沢医科大学附属薬学専門部卒業アルバム⁽⁵⁾に、特別講演する浅野の写真(図2)が収められている。

三、浅野三千三の著書

金沢大学自然科学系図書館に兼松鉄雄との共著「基礎実験化学」⁽⁶⁾が架蔵されている。序に「実験事項はことさらに高尚新奇を避けているが其の方法はつとめて広く基礎的なものを網羅している積りである。之を応用すれば相当の範囲まで実験し得ること信ずる」とあるように、記載は体系的具体的に応用への配慮もある。浅野没後の昭和二十七年、秋谷七郎、浮田忠之進との共著として著された「化学実験法」⁽⁶⁾は、「基礎実験化学」に基づきつつ、核酸や核蛋白質など新しい要素も含む。「次の時代に立ち上るべき若い化学徒の為に」とのまえがきは、浅野の遺言であるかのよう



図2 浅野三千三教授帝国学士院賞受賞特別講演⁽⁴⁾

帝国学士院賞が授与された。授賞審査要旨⁽³⁾には「著者は三種の地衣脂肪酸(リヘステリン酸、カベラット酸、ネフロモプシン酸)の構造を決定し、又二種のプルヴィン酸系地衣色素(ピナス

トリン酸、カリチン)の構造を決定したのみならず、一般研究方法と合成法とに重要な改良を行い地衣成分研究方法に貢献すること多大なり」と記載されている(括弧内筆者付記)。自然界に存在する有機化合物の構造を化学合成で検証しつつ決定する、これが浅野薬学の真骨頂であり、帝国

四、芥川龍之介との交友

浅野は府立三中・一高時代から芥川龍之介と親交があった。「再 蜜柑の樹下にて 竜 浅野君硯北」と文末に記された浅野三千三宛大正二(一九一三)年八月十二日付けの手紙が「芥川龍之助書簡集」⁽⁷⁾に収められている。Tolstoi, Turgenief, Gorky, Andreievなどのロシアものの英訳多く且大抵やさしく候へば一週に二、三冊づゝよめる可く候」との記述の傍ら、「四年たてど英語も独逸語も呉下の旧阿蒙にていやになり候。和文はよめず漢籍はわからず外国語はそら覚えでは何の役に立ちさうもなく、もう少しどうかした頭に生まれ返つて来なければ駄目と思ひ候」と龍之介ほどの才人にして尚斯く感ずることがあったのかと驚かせる述懐もある。二千字を超す部分が読書に関係しており、手紙は「友を選ばば書を読み」という二人の母校の寮歌中の一節を連想させる。

(1) 『金沢大学医学部創立百五十周年記念誌』第一部第九章和田隆志、山本博「平成時代―新時代への幕開け」(平成二十四年十月二十三日発行)

(2) 浅野三千三「Heinrich Wieland先生と日本の化学者たち」⁽⁴⁾ 感性豊かな科学者 浅野三千三「化学四十五巻四号一五七頁(平成二年化学同人発行)

(3) <http://www.japan-acad.go.jp/pdf/youshi/026/asano.pdf>

(4) 昭和十三年金沢医科大学附属薬学専門部卒業アルバム(金沢大学医学図書館所蔵)

(5) 浅野三千三、兼松鉄雄「基礎実験化学」(昭和十三年三月十五日科学書院発行、南山堂発売)(金沢大学自然科学系図書館所蔵)

(6) 浅野三千三、秋谷七郎、浮田忠之進「化学実験法」(昭和二十七年六月二十五日南山堂発行)

(7) 「芥川龍之介書簡集」(平成二十一年十月十五日岩波書店発行)(金沢大学中央図書館所蔵)

何を今さら

力丸 修 (昭和三十六年卒業)



記念品

診察机の引き出しを見ていたら奥の方にゴチャゴチャと小物が一杯詰まっていた。記念品と書かれた小さなボール紙の箱を見つ

け、開けて見たらメダルが入っているの
で添え書きを見ると、医学部創立百年記
念とある。あくこれなら私も持っている
と仰る方もいらつしやると思うが、それ
が冒頭の写真である。

加賀前田藩の援助で彦三種痘所として
発足した医学部の前身は、その後名称変
更が十一回にもなるとのこと。その中で
も第四高等学校、金沢医学専門学校とし
て現在の金沢大学の校章と梅鉢の紋をあ
しらって、裏面には一八六二—一九六二
と刻まれているので創立百周年記念であ
ることが分かる。この添え書きを読んで
いる内に、手の平のメダルがずつしりと
重みを増していった。

そう言えば一昨年は百五十周年だった
などと思い、卒業後半世紀以上経った節目
を実感しているような思いに出浸ってい
た。

がありましたと報告。さあ大変。誰だろう、
どんな言葉遣いをしたのだろうと皆で考
えるが分からない。結局、私の喋る金沢
弁が気に障ったのではないかと結論した。

私の金沢弁

医者になってから五十年も経つと当た
り前になってしまった金沢弁であるが、
昔はそうではなかったように思う。卒業
インターンの時に、昔の鳴和病院の院長
である大先輩の浅地の忠さんが、一杯飲
ますから皆来ーいとお招待に与った。勿
論病院の一室ではあるが、お前ら患者に、
どうなさいましたか?とか、何処がお痛
みでしょうかなんて言うたらダメやぞと
お教え頂いた。その時、フーンそんなも
んかなと思つたのだが、教えに反して、
それ以降も患者さんには一生懸命標準語
で喋っていたように思う。

随分前の話になるが、金沢のある放送
局から病気のことに付いて声の出演を依
頼された。断りきれずに一回だけと収録
をして貰つたが、放送のあつたあとで上
の方からあれは面白いからもう一回頼ん
でこいとかで毎週続けて四回も放送され
る破目になってしまった。館内には何時
も放送番組が流されているらしいが、上
の人が何を面白く思つたのか分からない。

ある日、うちへ来た患者さんから、先
生の放送を聞いたけど良かったよ。へー
何良かったの。何時も病気の話の放送
を聞くけど東京からやろ、あんな話は右
の耳から入って左へ抜けてしまつてな
人も頭に残らんや、それに比べて先生
の話は金沢弁やからスーッと頭の中に入
るから良かった、とのこと。

私は哑然とした。机の上にタオルを置
いて緊張の為ドカドカ出る汗を拭きなが

ら、一生懸命に標準語を使って収録して
貰つた積もりだったのだが。それを聞いて
以来、患者さんに標準語で喋るのを止
めてしまった。

医者に出来ること

聞きにくい時間帯の私の放送を何時も
聞いていて、私の金沢弁を指摘した患者
さんは、その後、緩和ケア病棟に入院さ
れていたことが分かつた。残された少な
い人生を、ラジオを通じて自分の病状の
少しでも足しにしようとお真剣に聞いてい
らつしやつたに違いない。それを知つて
以来、医者つて患者さんに何をしてあげ
られるのか自問自答が始まつた。

医者が対応するのは健康診断を除けば、
殆どが弱者の病人であるので上から目線に
なり易い。それに比べて営業マンはどうだ
ろう。対応しなけりゃならん相手は多種
多様、いろんな対応を迫られる。世界の広
さが違うのではないかとと思うので、私は患

者さんとは診察の合間によく世間話をす
るようになった。世間話なら立場が対等だ
から、肩肘張らずに話ができる。病気の説
明もマニュアル的にサラサラと言うのでは
なく自分の言葉で心がけている。

その中に少しでも、患者さんの琴線に
触れるような言葉があれば、信頼に繋が
るのではないかと。只でさえ弱者の心は傷
つきやすいのだからと心している。

幸い、町医者である私の周りは金沢弁
の分かる患者さんが殆どだ。卒業して半
世紀、まして、生まれも育ちも金沢の私
から金沢弁を抜いてしまえば何が残るだ
ろうか。今更標準語に直すことはとても
自信がない。あと何年患者さんと対峙し
ていけるか分からないが、これからも
安心した気持ちで患者さんが診察室を出
て行かれるよう頑張っていきたいと思
うのが現在の心境である。

.....

に、大なり小なり降り掛かつてきたので
すから、大変な時代でしたね。

まあ、若者が、観念的理想論に基づいて、
国家や権力や体制に反旗を掲げると言
うのは、いつの時代も変わりませぬ。言
わば若者の「熱病」のようなものです。
ですから、ノンポリ集団といえども「医
局改革」などという、その真意も十分理
解しないままに、連日のようにクラス討
論をしたり、またある時はデモ行進をし
ていました。あげくに、ある講座を学生
がポイコットしたら、逆に、その教授はリ
ベンジとして、卒試をポイコットした為
に、クラスの半数近くは、その年に卒業
出来なくなり、結果として、私共のクラ
スは、二分、三分してしまう事になつて
しまつたの

能登の老医の昔話

加藤 義博 (昭和四十六年卒業)

皆さん、こんにちは。能登の老医です。
私は、固い話や、格調高い話は苦手です
から、アホな一外科医の目線で見ると、昭和
四十年から五十年頃の医療にまつわる思
い出話を、少しさせて頂きます。古い昔話
ですから、酒の肴のつもりで、気楽にお聞
きください。

(卒業の頃)

昭和四十年代といえば、例の「学生運
動」が、燎原の火の如くに全国的に広が
つた時代です。この火の粉は、私のよう
な、いわゆるノンポリ学生たちにも、否
応無し

です。

この事は、当事者であるそれぞれの、その後の人生に、どんな影響があつたのでしょうか。

入学する時は、それぞれに、夢と希望と抱負を抱きながら、共に同じ教室で学び、クラブ活動を楽しみ、時に夜の街で酒を酌み交わした仲間が、卒業の時には、引き裂かれるように、袂を分かつ事になつたと言ふ事は、やはり、一つの学年としては、「不幸な学年」だつたのかもしれないね。

(M教授の思い出)

学生の間でも有名な、M教授を初めて目にしたのは、学生の臨床実習の授業でした。浅黒く精悍な顔立ちに、立派な髭を生やし、縦横共に大きな威厳のある堂々とした体躯の持ち主でした。そして、右手にスライド指し用の長い棒を、あたかも、金剛杖のように持つて立つ姿は、当時ベストセラーになつた「白い巨塔」のモデルにもなつたと噂されただけあつて、実に、他を押し睥睨する風格の持ち主でありました。

こんなボスの君臨する医局に入るのは、恐ろしい事だろうと内心思いながら、何の巡り合せか、まさに、その医局に入局させて貰う事になつてしまつたのです。

学生時代の件もあり、一年遅れで入局した五人の仲間は、入局した当初は「赤」のように思われて、上層部より警戒の色メガネで見られたり、時には、オーベンより「イジメ」的な仕打ちを受けることもあつたようですが、M教授は、その風貌の通りスケールのでかい人物でしたので、そんな些細な事は意に介さず、むしろ、目立たない場面では、それとなく心配りさえしてくれたものです。

そんなM教授は、外科医の勝負所である

手術室では、さすが、仁王様のように恐い存在でしたね。

入局三年目ぐらいになると、執刀教授の助手となつて、いわゆる糸結びが出来ようになるのですが、私が、助手を務めさせて貰つたのは、基礎系のある教授の「胃潰瘍」の手術でした。なにしろ、私にすれば初体験ですから、それはもう緊張しますよ。

糸結びは、指先の微妙な感覚で、きつちりと結ばなければならぬのですが、緊張して強く結ぶと、プツンと切れ、同時に、ライオンのような低い威嚇の声と同時に、ギョロリとした目で睨みつけられる。今度は、そつと結ぶと、緩んでしまつて、結紮の意味が無くなり、又しても、「低い唸り」と「ギョロリの睨み」。どちらにしてもダメなんです。プツン。「ウー」「ギョロリ」の連続ですよ。

こうして、外科医としての心構えの薫陶を受けたのです。

何しろ、M教授の手術手技には定評があつて、当時は、麻酔や失血の影響を出来るだけ少なくする為に、手際よく速く手術するのが肝要とされた時代でした。

M教授が、「胃切除」の主要な部分を終えるのは、常に二十数分ぐらいで、いつも、そのタイミングで時計をチラリと見て、納得し満足したような表情をされたものでした。

しかし、そのような厳しい外科の現場を離れると、又、M教授の全く別のプロフィールを眺める事が出来たのです。

何しろ、「清濁併せ呑む」スケールの持ち主でしたから、まつわるエピソードも数多くありました。

回診の時に、特室の「入らずの間」をチ

ラリと覗くと、真っ赤な絨毯が敷かれて、患者さんは、一見してアウトローの親分のような人だつたり、教室に、決して上品とは言えないご婦人方が出入りしたりしていましたね。

M教授はお酒が大好きでしたから、ノミ会もよくありました。

季節になると、郊外にタケノコのフルコースを食べに行つたり、能登島に夜釣りに行つたりしたものです。

中でも、最大のノミ会は、ある何周年かの記念の時に、片町では当時最大規模を誇つたキャバレーHを全部借り切つて宴会をした時でした。これには、さすがに度肝を抜かれましたね。

そして、酒席ともなれば、日頃の仁王様が、あたかもイタズラ坊主のような顔になつて、「女性を愛せない人間が、患者を愛する事は出来んよ」と公言して憚らないのです。中には、この教え(?)を忠実に実行した教室員も少なからずいたようです。

M教授の、この表情を見ることの出来たのも、教室員だつたからこそで、学生には、ちよつと、想像はつかかなかつたでしょうね。

この様な、いろんな意味で、スケールのでかい教授は、現在の様なご時世では、生まれ難い様な気がします。そんな意味で、ある種の郷愁を込めて、M教授の思い出をご紹介します。

(当時の外科医・整形外科医の実態)

ついでに、昭和四十年から五十年頃の外科医・整形外科医の実態について少しお話ししておきましょう。

当時は、外科医は未だまだ不足状態でした。大病院などでは、最低限の数は揃える事が出来ていたようですが、中小の病院

や都市部以外の病院などでは一人外科医長と言ふのはザラで、手術などがある時のみ、医局から応援して貰うと言ふのがごく普通のパターンでした。

ましてや、整形外科医となると、中小の病院では、常勤のいない所が殆んどで、週に一度の診察日が有れば、未だ良い方でした。

ですから、私共、一般外科医が捻挫・脱臼・骨折などの症例も扱わねばなりません。勿論、複雑なものや関節付近の骨折などは手に負えませんから、大学などへ送る訳ですが、ギプス固定などは盛んにやっていましたし、時には、鎖骨や指の骨折を鋼線で固定することなどもやっていましたね。

一時期、私のいた能登の病院では、当時は、道路事情も悪く、大学からだとは片道三時間ぐらいかかる為、緊急手術などでSO Sを発しても、人集めや何やで、結局四から五時間がかかつてしまつて、最早、「緊急」の意味が無くなつてしまつたのです。

そこで、「消化管出血」「穿孔性腹膜炎」「イレウス」などの緊急を要する場合は、止む無く、一人で、麻酔医・執刀医・助手の三役をこなさざるを得なくなる訳です。

ここでは、一年間で、百例近くあつた全身麻酔の手術のうち、二十例近くは、そんなことを一人でやつていたと思えます。

最近の若いドクターが聞けば、ビックリ仰天する話ですね。

まあ、クソ度胸と蛮勇のなせるワザでしょう。それと同時に、世の中は、未だ、医師に寛大であつた事もあり、そんなことも許されたのでしようね。

長々の拙文にお付き合ひのほど、深く感謝します。

「遠回り」してみ

医学類五年 前田 振一郎

十全同窓会の皆様、はじめまして。医学類五年の前田振一郎と申します。咲き誇る桜に春の訪れを感じた昨今ですが、いかがお過ごしでしょうか。先日、ふと通りすがった兼六園で夜間コンサートが催されており、思いがけず美しいハーブの調べを楽しみました。園外に出ると、今度はかの有名な美術館が幻想的に浮かび上がり、まさに二十一世紀を感じさせてくれます。早いもので、そうした伝統と進取の気性息づく文化都市、金沢にやっできて三年の月日が経ちました。今では、弁当を忘れても傘を忘れることはなくなり、全国の回転寿司コンベアのほとんどを石川県の企業が製造しているというような重要な豆知識も身につけてきました。気分はいつでも金沢人であります。

さて、そんな私は、平成二十三年四月に医学類二年に編入しました、いわゆる学士です。今回このような執筆の機会を与えていただきましたので、社会人を経験してから医学の世界に入りなおした「遠回り組」(二説には「長老組」)の視点から、医学類に編入して感じることをいくつか述べさせていただきます。

まず、元々医学部でない場所で教育を受けた身としては、医学生はなんて忙しいのだろうと感じざるを得ません。私の元々の出身の法学部では、「法学部砂漠」と揶揄されたとおり、出席もとらない大教室でのマスプロ授業が当たり前でした。よく言えば自由、悪く言えばほったらかしです。「砂漠」だけに学校でほとんど

見かけないような消息不明の者も数多くおり、学生時代といえぼモラトリアムを謳歌する日々と相場が決まっていた。そのような中、学年が上がると多くが資格試験や公務員試験に向けて図書館にも生活を始めます。図書館の定位置にめいめい陣取った法学部生たちは、夜な夜な申し合わせたように図書館入口に集まり、片時の会話を楽しみつつ食堂に向かいます。そして、小一時間の腹ごしらえの後、またぞろ図書館に吸い込まれていく、そのような毎日が続きました。

かたや医学生のカリキュラムは、朝から晩まで数多くの必修科目で埋まっています。解剖学や生理学をはじめとした基礎医学から始まって、臨床医学、さらには病院実習を通して、人体に関する知識をみっちり叩き込まれます。自己責任を伴う放任を旨としていた法学部に比べれば、なんと懇切丁寧な教育なのでしょう。その上多くの学生が部活動にいそしみ、中には研究活動まで行う学生もいる訳ですから、頭が下がります。

半面、あえて「遠回り組」の視点から見ると、そのような多忙なカリキュラムこそが故に、医学生たちがやや狭い世界に閉じこもっているのではないかと感じることもあります。他学部とのカリキュラムの違いからやむを得ない部分があるとはいえ、部活動では医療系学生以外は入れないものも多く、法学部にいた頃にはほとんども排他的に見えたものでした。また、必修のカリキュラムを当然視する医学生は、

一般教養を始めとした他分野の勉強を無駄ととらえる傾向があるようにも感じます。「白猫であれ黒猫であれ、鼠を捕るのがよい猫である」という言もあるようで、患者さんにとつてはまずは病気を治せる医師がよい医師なわけですから、医学に注力することが最重要なことは言うを俟ちません。しかし、グローバル化の中で医療の在り方が問われ続け、医師の活躍の場も大きく広がる今日、どのような知識や体験が将来どのような役に立つとも限らないような気がします。世間での就職活動の厳しさとも無縁でいられる医学生だからこそ、飛び出せば若人たちよ！と、つい目線がますます遠回りになってしまふことがあるのは、私がかもしれません。

さて、私たち学士は、一学年五名というマイノリティながら、多様なバックグラウンドをもつて思い思いに勉強しています。研究者の方もいれば、歯科医師や薬剤師の資格を有する方々もおられます。編入学制度は全国の多くの医学部で実施されており、一般入試を再受験される方を含めて、さまざまな経歴を経て医師を志す仲間が大勢おられることに勇気付けられます。私の場合は、大学卒業後外務省に入省し、数年働いたのちに転身しました。初心忘るべからずとはよくいったものですが、金沢に来てからもよく聞かれる質問は、なぜ医学部に来たのか、ということ。曰く、「なんで仕事辞めちゃったんですか?」「前のままの方がよかったですか?」「前々、中には、「合計何年間学生やっているのですか、前田さん」と、愛にあふれた手厳しい(?)

つつこみをしてくれる同級生もいます。そうした質問を受けるたび、一言では語りつくせないという思いも胸に、「家族が病気になる体験から、患者さんに寄り添う医師になりたいと思った。」「誰からも叩かれ続ける官僚をやっていると、医師が目の前の患者さんに直接役に立てるところが魅力的だった。」など、時にまじめに、時にはぐらかしながら、私なりの転身の理由を答えます。しかし、実はそれほど大きな転換ではないのかもしれない、と感じることもあります。役所、とりわけ海外との窓口となる外務省の仕事の根本には、人と人とのコミュニケーションがありました。相手から話を聞きだし、違いを理解し、時に説得し、時に共感する。根気強くやりとりを続けて初めて聞きだした本音は、業界用語で「公電」と呼ばれる電報にまどめて関係各所に打電します。どこか、カルテと似ているところはないでしょうか。そして、そうした外交のキモは人と人との信頼関係である、そう教えられました。それは、患者さんとうき合う医師の仕事にも相通するものがあるのではないかと思っています。「遠回り」故の苦しさもありますが、転身を決断したからには過去の経験を生かしたい、一人でも多くの患者さんに私という医師に出会ってよかったと思ってもらえるよう努力したい、そう願う次第です。

五年生からはいよいよ病棟での実習が始まります。患者さんに接する機会も多く、今度は「医学」のみならず「医療」の実際を目にすることになるのかと思います。伝統ある金沢大学で学べることに感謝して、また両親はじめ周りの人への感謝を忘れず、一層気を引き締めて実習に取り組みたいと思っております。

救命活動で表彰状と感謝状を贈られる

関 裕介君 (医学類四年)

金沢大学医学類四年の関裕介君の救命活動に対して、平成二十六年一月三十日、草加市長より表彰状が、平成二十五年一月二十八日、草加市消防長より感謝状が贈られた。

平成二十五年一月一日、埼玉県草加市にある草加神社前の道路脇で倒れた六十代の男性がその家族から救命措置を受けていた。医師である父親と歯科医師である姉と一緒に草加神社へ初詣に訪れていた関裕介君(当時医学類三年)が、偶然、倒れた男性とその家族に遭遇した。即座に状況を理解した三人は、胸骨圧迫、人工呼吸を分担して行い救急車の到着を待った。救急車到着後は、三人で救急車に乗り込み、父親が気管挿管とアドレナリン静注をし、姉がバッグで換気を維持し、関裕介君が胸骨圧迫を続け、AEDにより心拍再開をみた。男性は越谷市の獨協医科大学越谷病院に搬送され、一命を取り留め、意識の回復もみられた。関裕介君、父親



姉の連携による適切な処置と指示により人命の救助に至った。

表彰状と感謝状を授与されたことに対して、関君は、「躊躇しそうな気持ちは振り払い、勇気をもって人命救助を行いました。医師になる上でこの経験を心に留め、医学を学んでいきたいと思えます。」と感想を述べた。

(若山 友彦 記)

謝恩会

三月二十二日、金沢ニューグランドホテルにて平成二十五年度卒業生による謝恩会が執り行われました。

会には多くの先生方にご出席いただき、和やかな雰囲気の中開会しました。まず山本健医学類長からお言葉を頂き、富田勝郎病院長の乾杯の音頭で宴会が始まりました。

さらに山本博医学系長、井関尚一医薬保健学域長、堀修学生支援委員長より、お言葉を頂きました。

今年は、卒業生によるバンド演奏や、金沢を中心に活躍するマジシャンKANZUさんによるマジックショーに挑戦しました。そういったレクリエーションの中、六年間の大学生活を回想しつつ、先生方と交流し、先生方のお言葉に聞き入る学生が多かったように感じます。

思い返すと一年一年は長いもの、あつという間の六年間でした。その間、

たくさん先生方や同級生に支えられてきたことを実感し、感謝の気持ちが自然とわき上がってきました。今年度は勉強場所が確保しにくい中、田臨床研究棟を自習室として提供して頂き、ビデオ講座や模擬試験などの国家試験対策を手厚くして頂きました。心から感謝申し上げます。最後に、卒業生代表の岡直輝君、赤路由希子さんが挨拶し、盛会のうちに、閉会となりました。

平成二十年四月に金沢大学が学域学類制に改組されたことに伴い、私たちが医薬保健学域医学類としての最初の卒業生

平成二十六年三月卒業生進路

となりました。金沢大学医薬保健学域医学類で学び成長できたことを誇りに思い、各々が新しい環境の下、精進していく所存です。

最後になりましたが、謝恩会にご参加いただいた先生方、そして六年間ご指導いただいた先生方、大学関係者の方々に改めて感謝し、御礼申し上げます。ありがとうございました。今後とも、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひします。

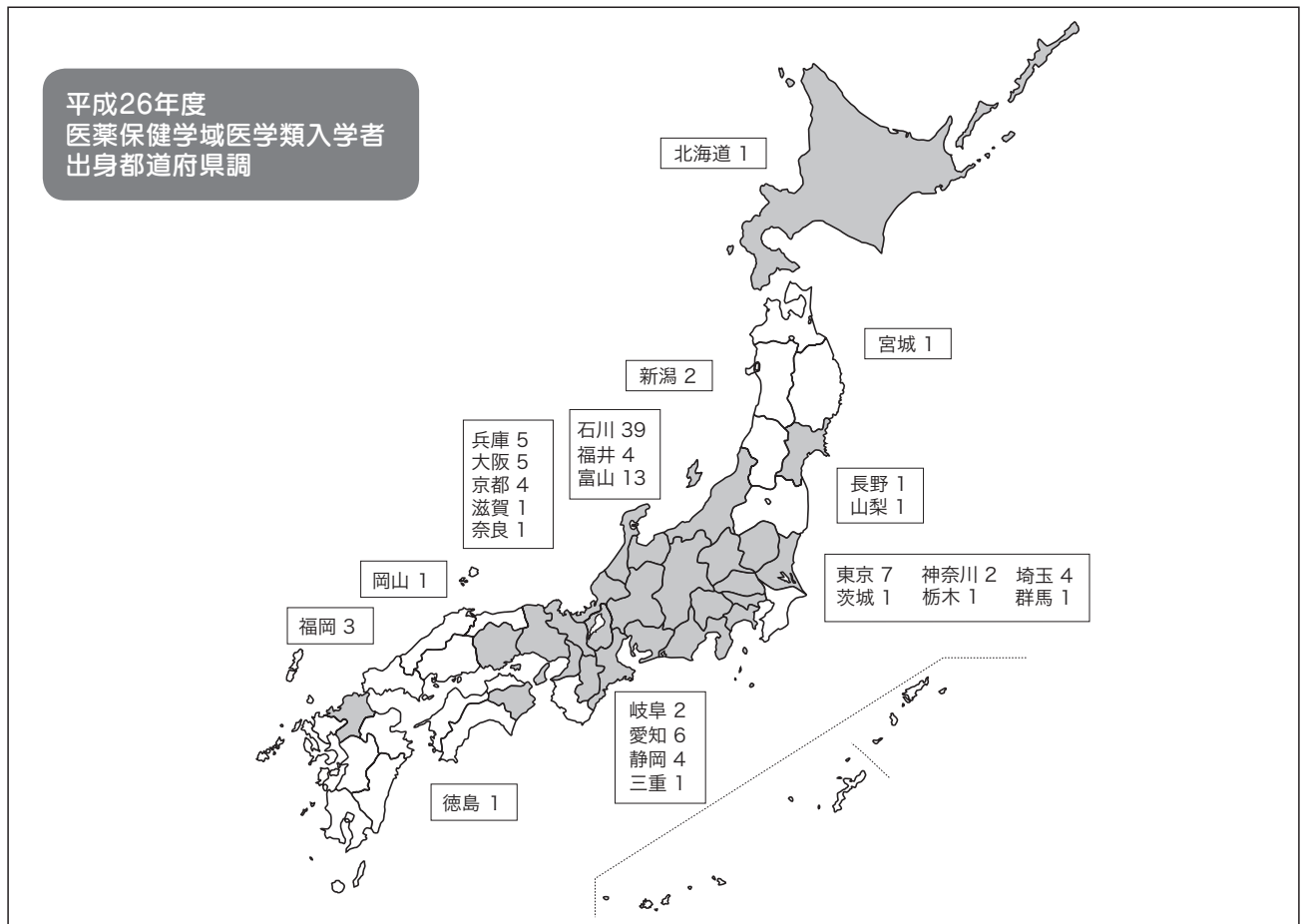
(平成二十五年年度

謝恩会実行委員長 山本 森太郎 記)

青山 慧	東京医科歯科大学附属病院	岡 直輝	亀田総合病院
赤川 大介	長野赤十字病院	岡田亜希子	トヨタ記念病院
赤路佑希子	京都府立医科大学附属病院	尾形 洋平	仙台市立病院
秋山 久	福井県立病院	岡本 純平	金沢大学附属病院
安念 遼平	厚生連高岡病院	小川 憲人	中部ろうさい病院
池田 暁彦	小倉記念病院	越智 雅彦	金沢大学附属病院
石井 健太	埼玉県済生会川口総合病院	笠間 春輝	石川県立中央病院
石井 奏	金沢大学附属病院	加藤 陽介	金沢大学附属病院
石山みず穂	国立病院機構金沢医療センター	金谷 雅之	神戸市立医療センター
稲垣 計	中部ろうさい病院	金子 勇貴	中央市民病院
猪股 兼人	埼玉県済生会川口総合病院	金平 典之	金沢大学附属病院
岩元 香奈	金沢大学附属病院	神島 泰樹	岡山大学病院
上坂 謙悟	金沢大学附属病院	亀谷 仁郁	富山県立中央病院
宇佐美雅章	金沢大学附属病院	神田 龍人	公立能登総合病院
宇野 豪洋	金沢大学附属病院	岸谷 和輝	公立松任石川中央病院
漆原 涼太	富山県立中央病院	小池 洋平	関東労災病院
大里 祐樹	大阪労災病院	越田 剛生	神戸大学病院
大貫 佳春		後藤 久典	板橋中央総合病院
大矢 和正	筑波大学附属病院水戸地域	後藤 夕輝	京都大学附属病院
		古谷野康記	麻生飯塚病院
			板橋中央総合病院

橋向 大輝	富山県立中央病院
萩田淳一郎	医療法人豊田会
西野 翼	金沢大学附属病院
西野 和樹	金沢大学附属病院
西川 哲生	福井県立病院
西田 圭吾	金沢大学附属病院
西川 貴史	堺市立病院機構
中山 真吾	慶応義塾大学病院
中村 友祐	金沢大学附属病院
豊田 純哉	済生会横浜市南部病院
道傳 研太	石川県立中央病院
東郷 泰平	金沢大学附属病院
寺嶋 祐貴	倉敷中央病院
辻 紀章	虎の門病院
玉井 翔	亀田総合病院
田中 健雄	富山県立中央病院
田中 亮太	東京都立墨東病院
橋 亮太	東京都立墨東病院
田中 真矢	東京厚生年金病院
田中 健雄	富山県立中央病院
竹下 一生	厚生連高岡病院
高橋 智彦	金沢大学附属病院
高橋 慧	岩手県立中央病院
高野 晃暢	金沢大学附属病院
高相 裕司	富山県立中央病院
高田 省吾	金沢医療センター
高橋 裕	総合病院国保旭中央病院
鈴木 信博	産婦人科コース
臺藏 綾霞	静岡県立総合病院
鈴木 直宏	岡山大学病院
杉山博太郎	岡山大学病院
杉浦 英恵	金沢大学附属病院
菅原 大輔	総合病院国保旭中央病院
渋谷 陽平	相模原協同病院
佐藤 文哉	一宮市立市民病院
佐々木香織	神戸大学医学部附属病院
林 悠大朗	都立広尾病院
半田 真人	金沢大学附属病院
東 友理	黒部市民病院
東川 尚人	埼玉県済生会川口総合病院
樋上 拓哉	金沢大学附属病院
福田 隆文	厚生連高岡病院
福見 拓也	岡山大学病院
古澤 香織	富山県立中央病院
堀内 俊男	自治医科大学附属病院
松下 祐紀	国立国際医療研究センター病院
松本錦之介	大阪府立急性期総合医療センター
水野 隆史	京都第二赤十字病院
三野 耕平	東京大学医学部附属病院
皆川 英之	Bプログラム
宮下 紘和	湘南鎌倉総合病院
村田亜香里	黒部市民病院
村田瑠璃子	金沢医療センター
村松 大輝	金沢大学附属病院
村松 真弥	国立国際医療研究センター病院
百瀬 匡	沖縄県立中部病院
森下 悠也	東京大学医学部附属病院
諸角 聡美	金沢大学附属病院
山口 鋼正	金沢大学附属病院
山崎 成敏	埼玉県済生会川口総合病院
山村 伊代	石川県立中央病院
山本森太郎	三井記念病院
横山貴和子	慶応義塾大学病院
吉田 春佳	社会医療法人愛仁会
高槻病院	高槻病院

一〇一名(五〇音順)



渡辺治先生レリーフの設置について

平成二十六年三月、医学類C棟一階に昭和十五年金沢医科大学卒業の渡辺治先生のレリーフが設置され、同月二十日、除幕式が行われた。

C棟新築は、宝町・鶴間地区再開発・金沢大学総合移転事業当初計画最後の事業であり、第一期工事は平成二十二年三月に着工、第二期工事も平成二十三年度には着工されることが期待されていた。しかし、政権交代等により第二期工事は暗礁に乗り上げ、中村信一前学長、古川俊前理事をはじめとする本学首脳部と所掌部署は非常な熱意を持って文部科学省との折衝を重ねた。途中投げかけられた難題は、がん研究所が角間に移転した後、の空きスペースを代替させてはどうかという文部科学省からの提案であった。旧臨床研究棟の総床面積は一万一千平方メートル、C棟第一期工事は八千平方メートル、旧がん研建物が三千平方メートル、後二者を足すと前者に相当するという計算であった。しかし、旧がん研はD棟として整備し、連

合大学院、子どもたちの発達研究センター、共同大学院等の教育研究活動を行うスペースとするとの構想があり、また、臨床研究の円滑な推進、診療への迅速な対応、研究分野間の連携などのためにも、臨床

研究分野の研究スペースと居室はC棟第一期分に隣接させて確保することが必須であった。粘りつよい折衝の結果、三千平方メートルの床面積をもつC棟第二期工事が国の事業として採択された。ただし、予算の一部を自己財源から担保することが求められ、このとき母校を救ったのが渡辺基金、すなわち故渡辺治先生が生前母校に寄附され、医学系が将来に備えて温存していた一億円、および、全学から醸出された特別事業費約一億円、計約二億円であった。

渡辺治先生は旧内科学第二教室出身、石川県済生会病院長を経、学生時代から縁の深かった和沢家の隣地で内科医院を営まれていた。平成六年四月、渡辺先生が懇意にされていた微生物学教室中村信一教授に渡辺先生ご本人から寄附の申し出があり、ご篤志は医学部教授会の下に設けられた「渡辺基金運用委員会」により管理されてきた。渡辺先生は、平成四年に金沢大学医学部附属病院整形外科で

腰椎の手術を受けられ、持病の腰痛が完治したことにはたいへん感謝されていたという。この折の執刀医は富田勝郎前教授、麻酔担当医は山本健前教授であった。渡辺先生は平成十年四月四日に逝去された。

写真にはC棟一階に設置された渡辺治先生のレリーフ。制作は金沢美術工芸大学石田陽介教授。レリーフの上の「渡辺治先生」の揮毫は中村前学長。レリーフの下には「本研究棟第二期工事は平成二十四年十二月二十五日に着工され平成二十六年三月十四日に竣工した。工事予算中一億円は金沢医科大学昭和十五年卒業の渡辺治先生の御寄附に依った。ここにこの像を建立し渡辺先生の御篤志を永く顕彰する」との説明文が付されている。

（山本 博 記）



編集後記

新年度を迎え、同窓会員の皆様にはますますご活躍のことと拝察いたします。例年のことながら宝町キャンパスでも多くの職員、学生の出入りがあり、新しい季節の訪れを感じさせられます。キャンパスの再開発も一段と進み、現在は生協と旧がん研究所の建物が改装中です。かつて外来診療棟があった場所は駐車場になり、大学病院の前景は大きく変わります。

この春は中沼安二先生、加藤聖先生、山本健先生、宮本謙一先生、小泉順二先生が定年を迎えられました。五名の教授のご挨拶に加えて、同窓会会員の受賞、医師国家試験の結果、卒業生の進路、医学類入学状況などが掲載され、会報一五七号は重厚な内容となっています。学生も含むさまざまな年代の会員の方々が多方面で活躍されていて、心強い限りです。

四月より理事・副学長に山本博先生が就任されました。医薬保健学域・研究域長に井関尚一先生が再任され、医薬保健学総合研究科長・医薬保健研究域医学系長に金子周一先生、医学類長に多久和陽先生が就任されました。附属病院病院長は、並木幹夫先生が担当されます。新しい体制のもと、母校がさらに発展することを願ってやみません。

また、本会報編集に長年ご尽力くださいました山本健先生、加藤聖先生ののご退職に伴い、蒲田敏文先生、絹谷清剛先生、横山茂の三名が新たに編集委員に加わりました。今後の紙面作りに同窓会の皆様の一層のご参加、ご助言を賜ります様お願い申し上げます。（編集委員 横山 茂 記）